

北原3号墳 北原遺跡

—— 県道観音寺善通寺線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 ——

1995

香 川 県 教 育 委 員 会



凡 例

1. 本書は県道観音寺善通寺線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書は平成6年度に発掘調査を行った香川県善通寺市善通寺町字北原所在の北原3号墳・北原遺跡の調査報告を収録する。
3. 調査は香川県土木部道路建設課の依頼を受け、香川県教育委員会が実施した。
4. 調査は文化行政課主任技師森下英治が担当した。
5. 本書挿図中のレベル高はすべて海拔、方位は第四系国土座標に基づく。また挿図の一部に建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図「善通寺」を使用した。
6. 発掘調査、整理作業を通じて香川県土木部道路建設課、善通寺市教育委員会、香川県埋蔵文化財調査センターその他関係各位より多大なご協力、ご援助を得た。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)
7. 本書の執筆・編集は森下が担当した。
8. 出土遺物は香川県教育委員会が保管しており、坂出市府中町字南谷5004-1香川県埋蔵文化財センターにおいて収蔵している。

目 次

第1章	調査に至る経緯と調査の経過	1
第2章	遺跡の立地と環境	2
第3章	調査結果	8
第1節	概 要	8
第2節	北原3号墳	9
(1)	墳丘と周濠	9
(2)	石 室	15
(3)	出土遺物	18
第3節	北原遺跡	22
(1)	SH-01	22
(2)	SH-01出土遺物	23
第4章	ま と め	26
(1)	石室構造について	26
(2)	所属時期と追葬期間	26
(3)	副葬品から見た北原3号墳の意義	27
(4)	北原遺跡の弥生集落	28

挿図目次

第1図	試掘トレンチと北原1～3号墳の位置	1
第2図	周辺遺跡分布図	4
第3図	周辺遺跡詳細図(1/10,000)	6
第4図	調査前地形と調査区設定図	8
第5図	北原3号墳墳丘実測図	9
第6図	北原3号墳墳丘基底面実測図	10
第7図	北原3号墳墳丘断面図	13～14
第8図	北原3号墳石室実測図	15
第9図	玄室内遺物出土状態	17
第10図	玄室内出土須恵器実測図	19
第11図	玄室内出土耳環実測図	20
第12図	鉄器実測図	20
第13図	周濠出土須恵器実測図	21
第14図	周濠・盛土出土須恵器実測図	22
第15図	SH-01 実測図	23
第16図	SH-01 出土土器実測図	24
第17図	SH-01 出土石器実測図	25

図版目次

図版 1	北原 3 号墳全景（南より）	32
	北原 3 号墳全景（西より）	32
	発掘作業風景（西より）	32
図版 2	石室全景（南より）	33
	石室近景（南より）	33
	床面遺物出土状態（南より）	33
図版 3	鉄器出土状態	34
	袖部基底石抜き取り穴検出状況（東より）	34
	墳丘基底溝検出状況（西より）	34
図版 4	墳丘断面（Aライン西側）	35
	墳丘断面（Aライン東側）	35
	墳丘断面（Dライン）	35
図版 5	墳丘・周濠断面（Cライン）	36
	側壁基底石掘り方（Aライン東側）	36
	奥壁基底石掘り方（Bライン）	36
図版 6	竪穴住居検出状況（北より）	37
	竪穴住居完掘状況（西より）	37
図版 7		38
図版 8		39
図版 9		40
図版10	周濠等出土鉄滓	41

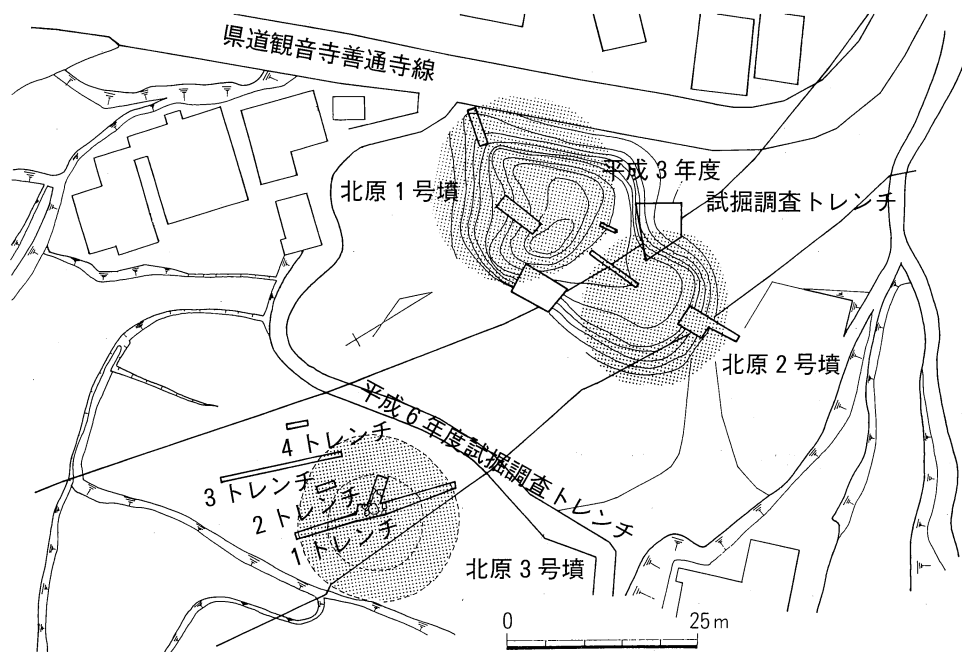
第1章 調査に至る経緯と調査の経過

県道観音寺善通寺線は丸亀平野と三豊平野を結ぶ幹線道路の一つである。善通寺市街地の西に控える香色山の南麓付近を通過すると、道幅が急に狭くなり、三豊平野との境となる大日峠に向う山間道となる。ミカン畑を縫って走る路線はカーブが多く、また古くから幹道として開けたルートであることから、交通量も多い。現代の車社会の中では危険度の高い箇所として認識されていた。県善通寺土木事務所は峠側から善通寺市街地に向かって道路の拡幅工事を進める計画をたて、平成3年度に周辺の文化財等について県教委文化行政課に照会した。

工事予定地内には前方後円墳とされていた北原古墳が存在し、保存協議が開始された。北原古墳は前方後円墳とはいえ、墳形が周辺の畑造成等により不明瞭であり、工事予定地外を含めた確認調査が必要と判断された。平成3年度、善通寺土木事務所の条件整備が行われた範囲において、文化行政課は工事予定地周辺を含めた北原古墳の試掘調査を行った。その結果、従来前方後円墳とされた山丘は直径15mほどの横穴式石室をもつ円墳が2基隣接したものであり、前方後円墳ではないことが判明し、北原1号墳、北原2号墳と命名された⁽¹⁾。この結果を受けて用地買収が終了した段階で、工事予定地内に含まれる北原2号墳の事前調査を行うことで協議が整った。

引き続き平成5年度には、北原古墳以外においても未確認の埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性があることから、北原古墳と同じ丘陵の南斜面地を中心に分布調査を実施し、翌平成6年度に試掘調査を実施した。その結果、北原古墳の南約50mの地点で新たに横穴式石室をもつ古墳を検出し、北原3号墳と命名した⁽²⁾上で、上記の事前調査必要範囲に含めることとなった。

ところが同路線の他の箇所の工事の関係上、北原3号墳が存在する地区約600㎡については平成6年度中に着工する必要があり、用地未買収箇所が残る北原2号墳とは切り離して早期の事前調査を行うよう、文化行政課に対して要請があった。すでにその時期には翌年度の大規模発掘調査事業計画が組まれており、やむなく当該年度後半に文化行政課が直営で対応することとなった。



第1図 試掘トレンチと北原1～3号墳の位置

調査は平成7年1月9日に着手し、同年2月10日に終了した。整理は適宜、香川県埋蔵文化財センター等で行った。調査・整理に際して次の方々にお世話になった。記して謝意を表す。

笹川龍一・國木健司・大久保徹也・森格也・古野徳久・蔵本晋司・多田 敦

第2章 遺跡の立地と環境

北原3号墳は善通寺市善通寺町大字北原に所在する。我拝師山から西南方向に伸びる尾根の南斜面に立地する。標高は約65mで、眼下の有岡谷に耕作される現在の水田面との比高差は約30mである。周辺の山塊は花崗岩を基盤とし、山頂には安山岩の讃岐層群が形成されているために、急峻な円錐形の側面観をもつものが多い。我拝師山も標高120m付近から481mの山頂までは斜面が極めて急峻である。遺跡が立地する尾根は、その傾斜が緩やかになり、ヤツデ状に尾根筋が拡散したものの一つであり、遺跡は尾根先端南側の谷奥部を見下ろす位置の花崗岩風化土壌層上に立地する。

北原古墳はかつて前方後円墳として知られていたが、近年の調査で1号墳と2号墳の二つの円墳から構成されることが判明した⁽³⁾。両古墳は尾根の先端頂部に立地しており、平野側への眺望もよい。以下各時代毎に遺跡東側に広がる丸亀平野の遺跡を概観する。

旧石器時代

近年の調査で旧石器時代の遺構遺物が見つまっている。三条黒島遺跡では140点からなる石器ブロックが検出され、瀬戸内技法を反映した接合資料が抽出された⁽⁴⁾。また、郡家田代遺跡ではナイフ形石器を中心とした石器群が出土した⁽⁵⁾。これらは地表下50～80cmの弥生時代以降の基盤層である黄色粘質シルト層中に包含されるもので、当該丸亀平野の形成を考察する上で重要な資料であると共に、一括資料が少ない当県の状況にあっては旧石器文化研究において極めて重要な資料であるといえる。

縄文時代

金倉川流域の低地部では、黄色系シルト層中に縄文土器が包含されていることが知られていた。遺構を把握している遺跡としては、三条番ノ原遺跡で当該期と推定される石鏃製作跡が見つまっている⁽⁶⁾ほか、龍川四条遺跡では晩期後半凸帯文期の旧河道が検出されている⁽⁷⁾。金倉川西岸では永井遺跡⁽⁸⁾や弘田川西岸遺跡⁽⁹⁾で後期の旧河道より多数の土器・石器が出土している。永井遺跡の打製石斧を主体とする石器組成は低地部集団の生業活動を示す重要な資料である。

弥生時代

弥生時代の周辺の遺跡は遺跡数が多いこともさることながら、集落、墓、青銅器出土地等多様な様相を見せる。

(前期)

土器様相として多条沈線による文様帯を付属しない前期前半段階の遺跡としては、稲木遺跡A地区の旧河道⁽¹⁰⁾、永井遺跡の旧河道上層⁽¹¹⁾より出土した土器群が相当し、外彎刃タイプの磨製石庖丁等が出土している。坂出市下川津遺跡⁽¹²⁾では同時期の竪穴住居跡などが出土しており、今後周辺地区における居住遺構の出土が期待される。

多条沈線および複帯構成の櫛描直線文の甕形土器を特徴とする前期後半～中期初頭段階の遺跡は各所で確認できている。この段階の特徴としては、環濠を伴う集落の存在が指摘される。高速道路建設によって調査が実施された龍川五条遺跡⁽¹³⁾では、南北60m、東西90mの二重の環濠を持つ集落のほぼ全容が明らかとなった。県道善通寺府中線改良に伴う五条遺跡調査区⁽¹⁴⁾と時期的に重複し、近接した箇所に複数の集落が存在する状況は集落間の関係等を検討する上で重要である。また、周溝墓や木棺墓等の墳墓が

出土しており、詳細については本報告を待つ必要があるが、今後注目される遺跡である。

丸亀市中の池遺跡⁽¹⁵⁾は金倉川東岸に立地する当遺跡と良く似た立地条件をもち三重の環濠を持つ集落として著名である。なお東岸地区では他に三条番ノ原遺跡、三条黒島遺跡、郡家田代遺跡等で土器の出土が知られるが、いずれも散発的であり、集落を確認するまでには至っていない。

西岸地区においては環濠が確認された集落跡はまだ見つかっていないものの、遺構・遺物は各所で確認されている。多度津町三井遺跡⁽¹⁶⁾では過去に多数の土器の出土が知られていたが、平成4年度の確認調査で3条の溝が検出され多数の遺物が出土していることから、居住域に近接した溝であることが推定され、環濠である可能性は高いものと考えられる。また、旧練兵場遺跡は弥生時代全般にわたる集落遺跡で当該地域の拠点集落と考えられるが、平成5年度の発掘調査⁽¹⁷⁾で当該期の袋状土坑が検出された。そのほか、甲山北遺跡、乾遺跡などで土器の出土が知られる。

なおこれらは前期後半に始まる集落が多く、そのほとんどが前期末～中期初頭段階で終焉し、中期前半に継続しないという特徴がある。中期前半の遺跡の分布が今一つ明らかでないが、この段階の画期をどのように把握するか今後の課題である。

ちなみに、周辺の出土青銅器中には細形形式の武器形祭器あるいは外縁付紐より古いと推定される銅鐸は今のところ知られていない。

(中期前半)

土器様相における凹線文出現以前の中期前半段階の遺構・遺物が確認されているのは旧練兵場遺跡の彼ノ宗地区⁽¹⁸⁾で、土坑6基が調査されている。このほか矢ノ塚遺跡⁽¹⁹⁾で集落形成が始まる。矢ノ塚遺跡出土の武器形土製品は当該期に所属する可能性が高い。また、天霧山南麓斜面に立地する月信遺跡⁽²⁰⁾は平成3年度に発掘調査が行われ、当該期の遺構・遺物が出土した。打製石剣や環状石斧の採集資料も紹介されている。この段階の遺跡は旧練兵場遺跡のように低地部の遺跡も存在するが、月信のように丘陵斜面部に立地する遺跡が出現していることは、中期後半の丘陵地を指向する集落立地に向かう萌芽的要素と考えられる。

青銅器関連遺跡として瓦谷遺跡で中細形銅剣4口、中細形銅矛1口、中広形銅剣1口、平形銅剣1口の一括埋納が知られている。また、我拝師山C遺跡出土の外縁付紐式流水文銅鐸は大阪府茨木市東奈良遺跡出土の2号鋳型で製作されたもので、大阪府豊中市桜塚銅鐸と同範関係にある。

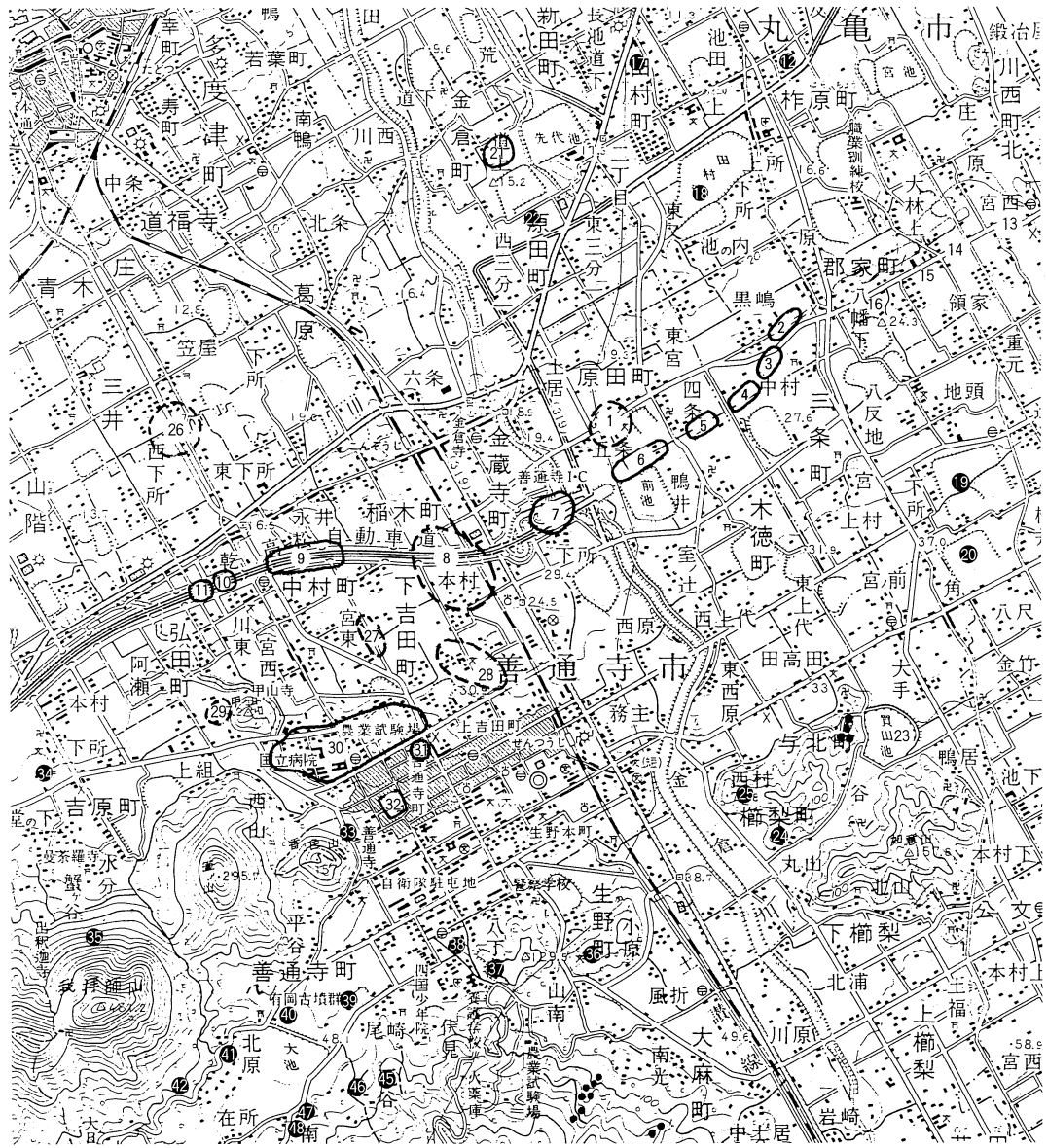
(中期後半)

土器様相として凹線文が文様の主体を占める中期後半段階の遺跡は先に触れたように、また、過去に指摘されたように丘陵地のものが多い。矢ノ塚遺跡、吉原火上山遺跡⁽²⁰⁾、西碑殿遺跡⁽²¹⁾等の立地は当該地に限らず、県内各地域に共通する傾向である。矢ノ塚遺跡では方形掘り形の柱穴をもつ掘立柱建物が多数確認され、同じ傾向が近接する西碑殿遺跡でも確認できることから、この時期の特徴として把握できる。反面、低地部に立地する旧練兵場遺跡では依然として集落形成がなされていることも明らかになっている。なお、庄内半島の先端に近い詫間町紫雲山遺跡⁽²³⁾は標高350mの丘陵山頂部に立地しており、同様な立地を示す遺跡は県内で多数知られている。低地遺跡、丘陵斜面地遺跡、山頂部遺跡の3つの類型がどのような機能差を持つものか、発掘調査事例が増加した現在、改めて検討する必要がある。

青銅器関連遺跡としては、扁平紐式銅鐸一口が北原シンネバエで出土している。

(後期)

後期前半の遺跡は今のところ数が少ない。旧練兵場遺跡で竪穴住居跡が確認されているほか、矢ノ塚遺跡はこの段階まで集落が継続する。



第2図 周辺遺跡分布図

- | | | |
|----------------------|------------------------|------------------------|
| 1 五条遺跡 (集落跡, 弥生) | 17 田村廃寺 (寺跡, 古代) | 33 善通寺西遺跡 (包含有地, 古墳) |
| 2 郡家原遺跡 (集落跡, 弥生) | 18 田村池遺跡 (包含地, 弥生) | 34 青龍古墳 (古墳) |
| 3 三条黒島遺跡 (集落跡, 旧石器) | 19 宝幢寺跡 (寺跡, 古代) | 35 大窪経塚古墳 (古墳) |
| 4 三条番の原遺跡 (集落跡, 弥生) | 20 柘池遺跡 (包含地, 弥生) | 36 磨臼山古墳 (古墳) |
| 5 龍川四条遺跡 (集落跡, 中世) | 21 中の池遺跡 (集落跡, 弥生) | 37 鶴ヶ峰4号墳 (古墳) |
| 6 龍川五条遺跡 (集落跡, 弥生) | 22 平池南遺跡 (集落跡, 縄文・弥生) | 38 若宮八幡古墳 (古墳) |
| 7 金蔵寺下所遺跡 (集落跡, 古代) | 23 鉢状山古墳群 (古墳) | 39 王墓山古墳 (古墳) |
| 8 稲木遺跡 (集落跡, 弥生) | 24 陣山遺跡 (青銅器, 弥生) | 40 菊塚古墳 (古墳) |
| 9 永井遺跡 (集落跡, 縄文) | 25 和霊神社古墳 (古墳) | 41 北原古墳 (古墳) |
| 10 中村遺跡 (集落跡, 中生) | 26 三井遺跡 (集落跡, 弥生) | 42 北原シンネバエ遺跡 (青銅器, 弥生) |
| 11 乾遺跡 (包含地, 中生) | 27 九頭神遺跡 (集落跡, 弥生) | 43 寺田古墳群 (古墳) |
| 12 田村遺跡 (包含地, 弥生) | 28 石川遺跡 (包含地, 弥生) | 44 岡古墳群 (古墳) |
| 13 川西北原遺跡 (集落跡, 中世) | 29 甲山北遺跡 (包含地, 弥生) | 45 瓦谷遺跡 (青銅器, 弥生) |
| 14 郡家田代遺跡 (集落跡, 中世) | 30 旧練兵場遺跡 (集落跡, 弥生・古墳) | 46 瓦谷1号墳 (古墳) |
| 15 郡家大林上遺跡 (集落跡, 近世) | 31 仲村廃寺 (寺跡, 古代) | 47 御館古墳 (古墳) |
| 16 郡家一里屋遺跡 (集落跡, 古代) | 32 善通寺跡 (寺跡, 古代) | 48 宮ヶ尾古墳 (古墳) |

後期後半にいたり、遺跡数が急激に増える。この段階に成立した遺跡は古墳時代初頭段階まで継続する傾向がある。

旧練兵場遺跡ではこの時期の竪穴住居跡が40棟以上出土しており、周辺の石川遺跡、九頭神遺跡、稲木遺跡など周辺に推定される微高地の多くに集落が形成された様子がうかがえる。五条遺跡周辺においては、龍川五条遺跡で竪穴住居跡が検出されているほか、郡家原遺跡、龍川四条遺跡、田村遺跡等この段階から集落形成が始まる遺跡が多い。

これらの遺跡から出土する土器は、組成の上で供膳形態の比率が増加する汎西日本的な傾向に共通するものの、鉢形土器がその主体であることはこの地域の特徴である。また、後期前半までの土器の様相は瀬戸内海を挟んで対峙する吉備地方との共通性を各所に指摘することが出来たが、この段階に至るとその傾向が払拭され、吉備の上東系列とは相容れない単口縁の広口壺、甕等が主体を占めるようになる。同じ時期、高松平野を中心にいわゆる『讃岐系』と呼称された土器群が成立する。角閃石を含み茶褐色を呈する独特の胎土をもった、きわめて画一化された土器様式で、県内のみならず播磨・阿波地方などに多数搬出されており⁽²⁴⁾、注目されている。これらを含めて、当該期は讃岐地方の弥生文化の独自性をもっとも強力に認められる段階である。

なお、青銅器関連遺跡として陣山遺跡、我拝師山遺跡A、同遺跡B、鶴ヶ峰西麓遺跡などで平形銅剣の一括埋納が知られる。いずれも形式的には新相を示す。平形銅剣は伊予、讃岐の両地方で全国出土量の8割方を占め当地域の特徴を示すが、先の土器様相の独自性の成立に何らかの形で関連している可能性が高い。

墓制の上では、稲木遺跡で前方後方形周溝墓が出土しているほか、旧練兵場遺跡仙遊地区で人面線刻を持つ箱式石棺が出土し、王墓山古墳周辺に当該期の箱式石棺墓、小竪穴式石室などが出土している⁽²⁵⁾。また、稲木遺跡では後の古墳時代初頭段階で認められる積石塚の萌芽的形態と推定される積石墓が出土している⁽²⁶⁾。高松平野以東では円形周溝墓等の検出も近年相次いでおり、このように讃岐地方には多彩な墓制がこの時期に認められる。

古墳時代

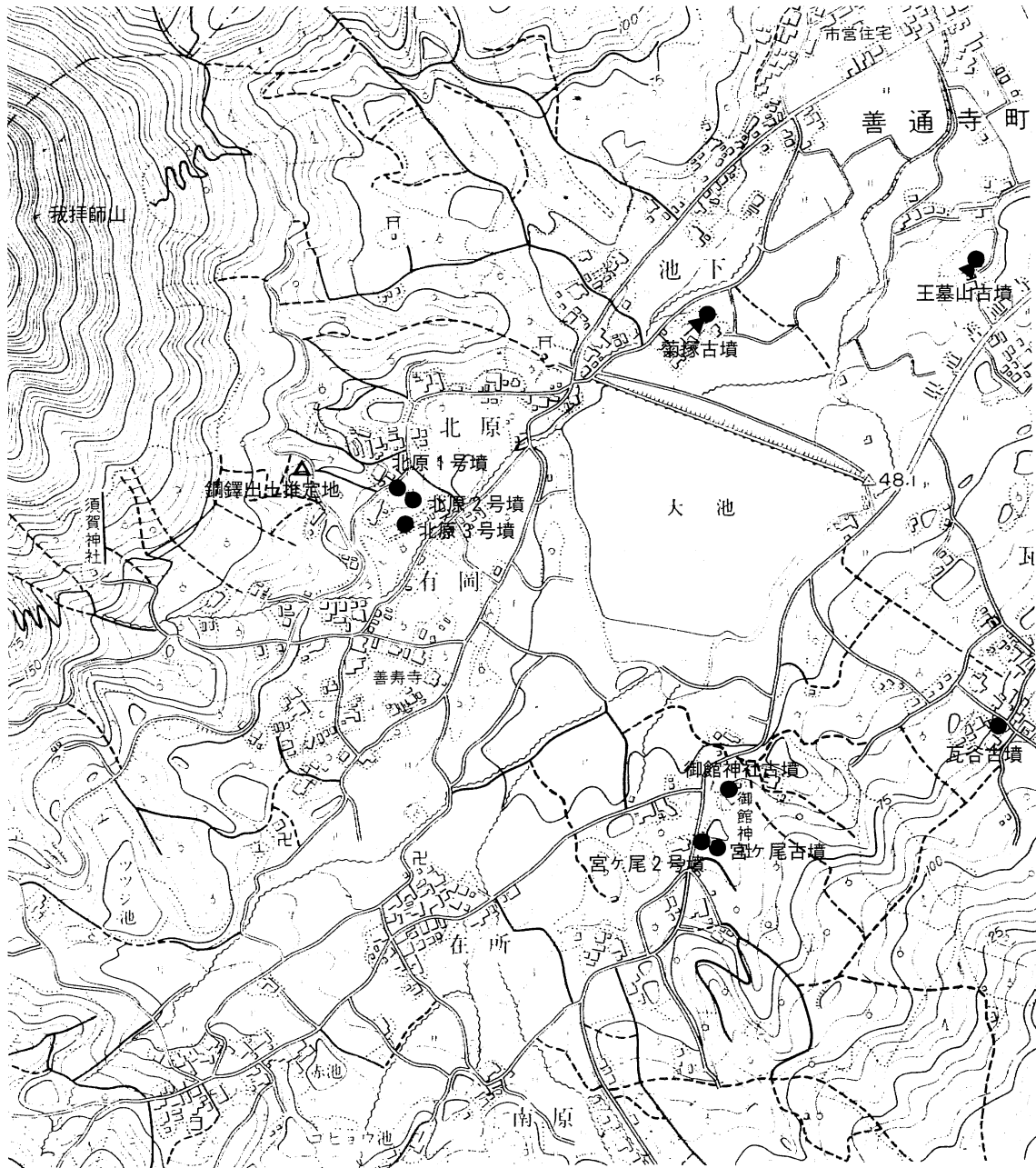
(古墳の分布)

前期に所属する古墳としては、大麻山中腹の標高405mという高所に位置する野田院古墳が全長46mの前方後円墳でこの地域の有力な勢力と考えられる。大麻山東麓にはこの他に大麻山経塚、大麻山碗塚、丸山1号など30~35mクラスの前方後円墳が集中する。これらは積石塚である点、埴輪を保持しない点等から在地的色彩の強い古式墳の一群といえる。

大麻山北方の独立丘陵周辺には鷲ノ山産石材による石棺が出土した磨臼山古墳をはじめ、北向八幡社古墳、鶴ヶ峰4号墳等の前方後円墳が所在する。いずれも盛土墳で、墳形等から考えると、先の積石塚前方後円墳に後出するものといえる。4世紀後半~5世紀前半代と推定されるが、この段階でも埴輪を持たない点で特異である。

中期大形円墳は吉原町青龍古墳⁽²⁷⁾、生野町生野鐘子塚古墳などが知られるが、詳細は明らかでない。

弘田川を遡り、有岡の谷筋周辺には王墓山⁽²⁸⁾、菊塚、宮ヶ尾などの有力墳が分布する。6世紀前葉の王墓山古墳は全長43mの前方後円墳で、小口石積みの古式横穴式石室内に石屋形を造作し、金銅装の馬具や冠帽などが出土している。宮ヶ尾古墳は6世紀末~7世紀の横穴式石室墳で、玄室奥壁に線刻壁画をもつ。



第3図 周辺遺跡詳細図 (1/10,000)

(集落)

善通寺西遺跡で5世紀前半代の流路から多数の土師器や木製品が出土している⁽²⁹⁾ほか、旧練兵場遺跡 仲村廃寺調査区や稲木遺跡において竪穴住居・掘立柱建物が見つかった。これらは、6世紀後半代に所属し竪穴住居は竈を付設しているものが多く見られる。

歴史時代

(寺院)

旧練兵場遺跡の一角に仲村廃寺が存在する⁽³⁰⁾。礎石が残るのみで、伽藍配置の詳細は明かでないが、現在の方格地割とは異なる方向性の土壇が検出されている。古式の川原寺式軒丸瓦が出土しており、白鳳初期の建立が想定される。

善通寺跡は現在の善通寺境内が該当し、文献的にも方二町の寺域をもつ大規模寺院であったことが判

明する。伽藍の方向は現在の方格地割に一致している。採集されている瓦⁽³¹⁾から白鳳期の建立と推定されるが、これまでに発掘調査は行われておらず、詳細は不明である。

(条里地割と集落)

平野に残る方格地割については高速道路建設等の発掘調査で、成果が見られた。これによると、平安期以降の坪界溝が多く、現在の方格地割の施工期を下らせて考える必要がある箇所が知られてきている。ただし、坪界溝の掘削時期について明確に得られるデータは少なく、各遺跡の調査報告が提示された段階で総合的に検討する必要がある。

なお、善通寺市街地の南側、善通寺西高校付近の生野本町遺跡では白鳳期から奈良前期にかけての方画地割と建物跡等が出土している⁽³²⁾。方向性については現在の方格地割と一致し、大形の建物が想定される点において、今後注目すべき遺跡と思われる。

古墳時代後期の集落は白鳳期に継続するものが多く、先の稲木遺跡や、金蔵寺下所遺跡⁽³³⁾などで掘立柱建物・溝からなる集落が知られている。両者とも7世紀末～8世紀中葉の段階で建物や溝の方向性が現在の方格地割に一致するような再編成が行われている。

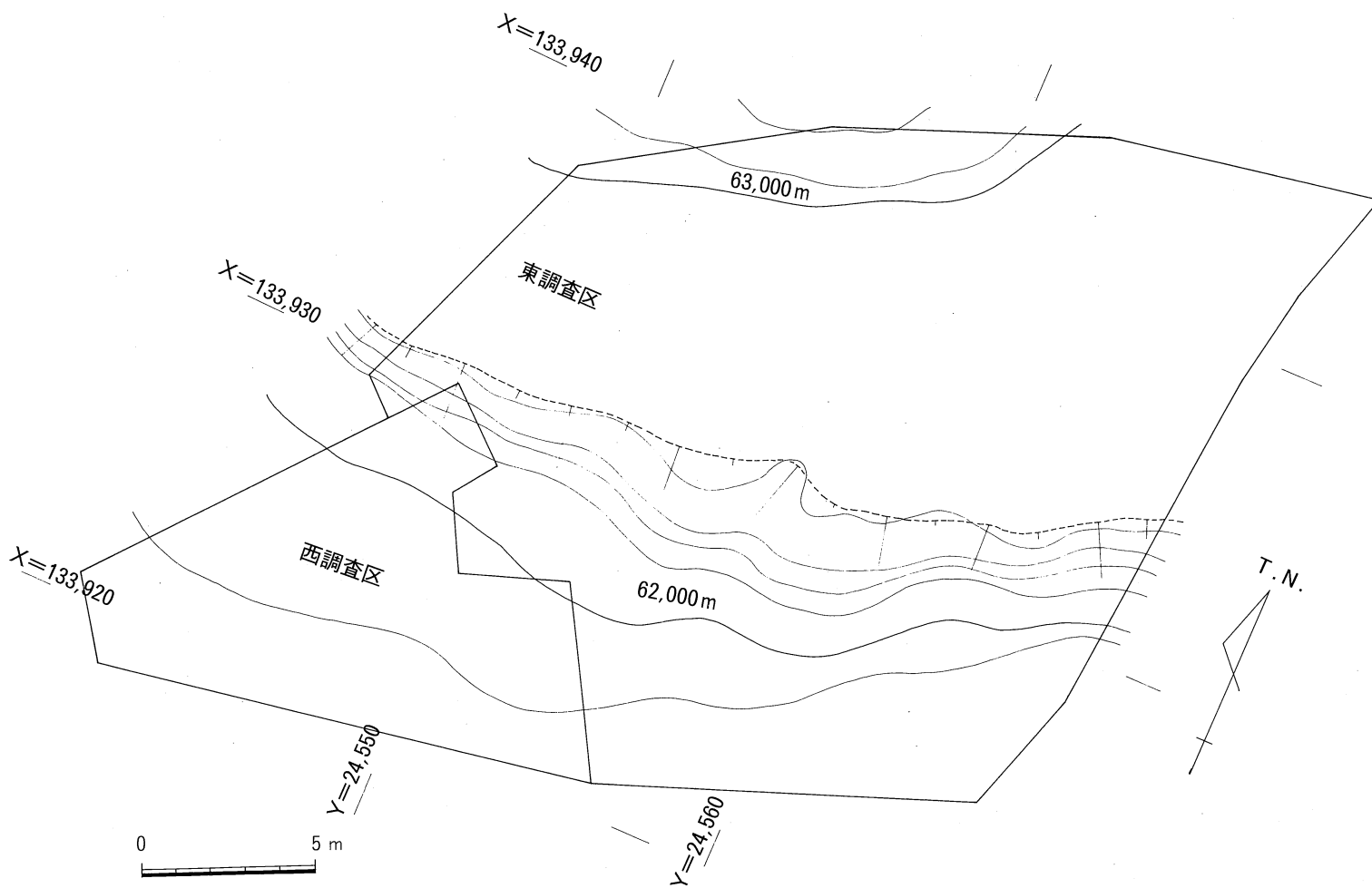
第3章 調査結果

第1節 概要

調査面積は600㎡である。調査着手時にはすでに撤去済であったが、調査対象地にはビニールハウスが建設されていた。また、周辺はミカン畑として古くから開墾されており、斜面を段整形している箇所が多く、調査対象地内も中央に東西方向の1 mほどの段が、また調査区に接して南側に2 mほどの段が簡単な石垣を伴って認められた(第4図)。

調査対象地内は南へ傾斜しており、西側の調査区では谷に向かって急激に傾斜する地形変化線を検出した。谷底は検出しておらず、さらに南に傾斜するものと考えられる。斜面堆積土中には少量の土器片が含まれていたが、傾斜が著しいことから谷底に崩落しているものと推定された。

北原3号墳は東側の調査区に広がっており、斜面地の地形変換線付近に立地している。



第4図 調査前地形と調査区設定図

第2節 北原3号墳

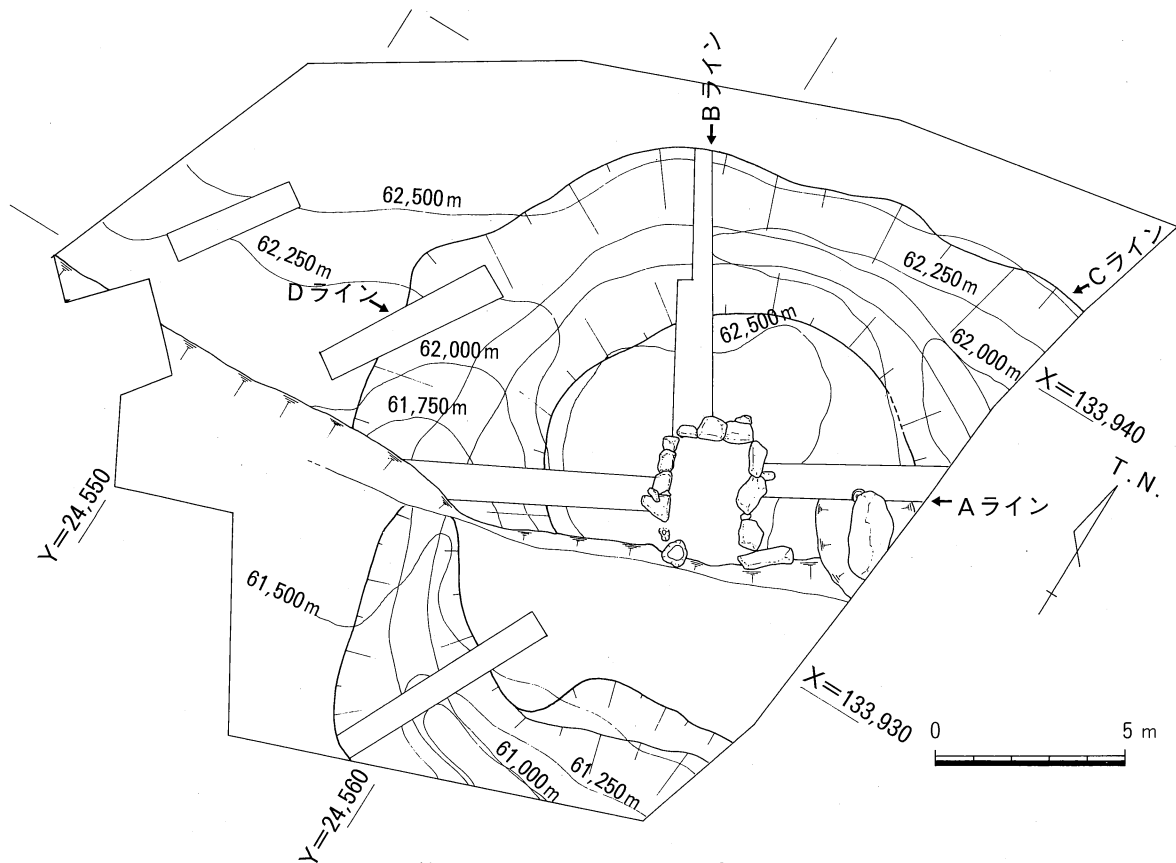
(1) 墳丘と周濠 (第5図)

a. 検出状況

調査前に墳丘はすでに削平を受け平坦な畑地となっていた。表土を除去した段階で横穴式石室基底石列が検出された。丘陵尾根側(墳丘北側)では、表土直下に花崗岩バイラン土を含む黄色系粘土の地山が露出し、上部を削平された周濠の掘り形が弧状に走行していることが確認された。墳丘西側は畑地を造成した際の整地土が周濠の上部に堆積しており、墳丘傾斜が遺存することを期待したが、整地以前の段階でかなり削平されており、元来の墳丘傾斜はとどめていないことが判明した。

墳丘南側は1/3ほどが造成時のカットを受けており、高さ60cmほどの段ができています。段部分では、一旦周濠は削平されて幅が狭くなっているが、南に向かうにつれて再び幅が広がり、石室開口部付近では前庭部の痕跡が確認された。

墳丘盛土は石室調査終了後、放射状に5方向にトレンチを入れて確認した。造成時にカットされた南側を除き、盛土構築手順を確認した。



第5図 北原3号墳墳丘実測図

b. 墳丘の規模と構築手順

古墳は南に傾斜する斜面に築造された直径15mの円墳である。墳丘の東側は未調査であるが、調査地内には周濠が全体に認められる。墳丘の中心に1基の横穴式石室が築かれ、石室主軸方向はS-30° Eで概ね南方向に開口する。

墳丘基底部の標高は、周濠底を測って北側が62.25m、南側が61.00mであり、延長15mで1.5m下降す

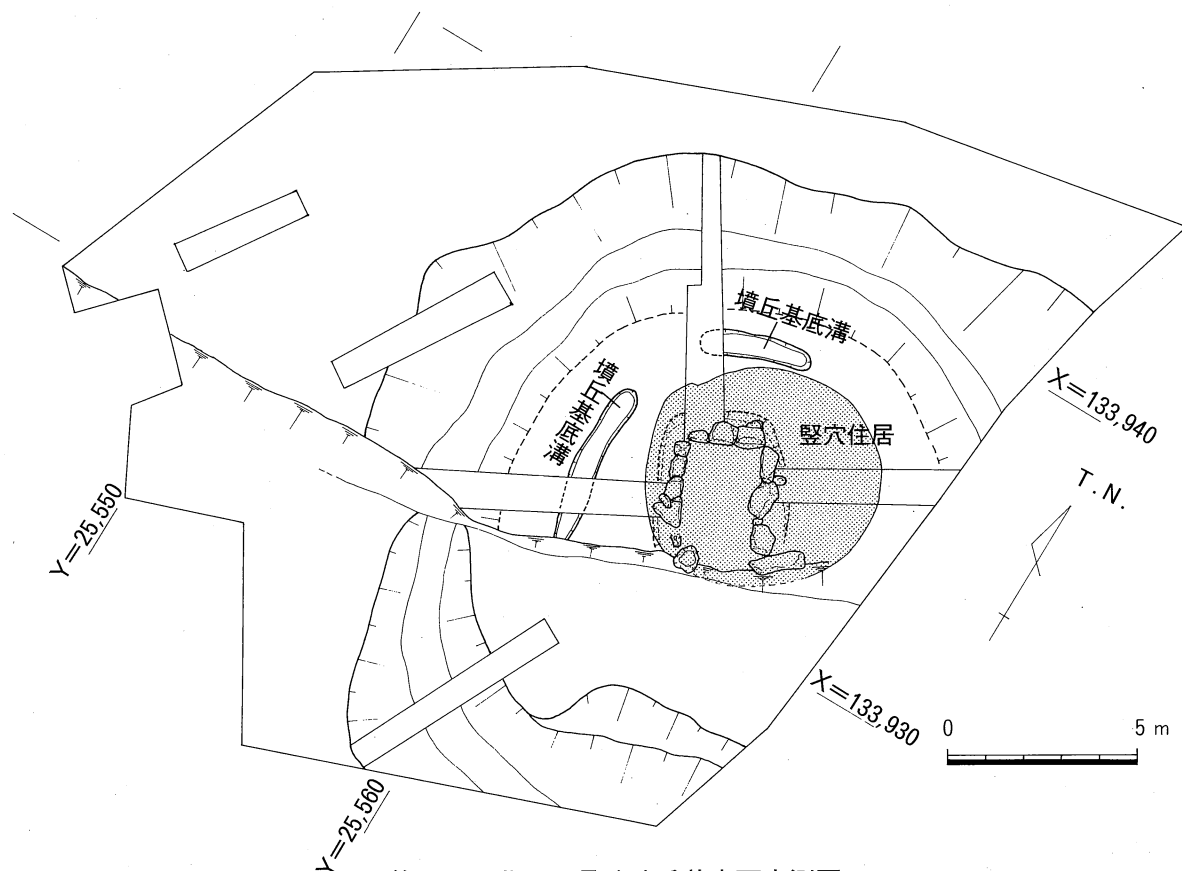
る約15°の傾斜が認められる。墳丘の築造に当たって基底部を水平に揃える意図はなかったものと思われる。周濠は4mほどの幅で検出したが、墳丘の崩壊土の継続的な流入が断面で認められないことから、築造後の開析による周濠幅の広がりを見積もる必要がある。したがって、検出した周濠の幅は元来の寸法より狭く見積もる必要がある。

墳丘の高さは現状では、周濠南側基底部と石室周辺の盛土上面を測って約1.5mであるが、石室の2段目以上の石積みや天井石の架構を考えると、最低でも2.5mはあったものと推定される。

墳丘に入れたトレンチ断面に基づき、墳丘および石室の構築手順を復元する。墳丘構築前の旧地形は、南に傾斜する緩斜面であったことは周辺地形の観察によって判明するが、墳丘部を細かく見ると、古墳が築造される以前に弥生時代後期初頭ごろの竪穴住居があり、その埋没途上の窪みを利用して墓坑を設定していることがわかる。

墓坑は基底石を据えるための掘り形と石室床面の平坦化を目的として掘削されている。Aライン西側では竪穴住居掘り形を10cmほど拡幅するのみで、掘り形付近の埋没途上の緩やかな段を利用して基底石を据えている。これに対して、Aライン東側およびBラインの奥壁側では竪穴住居埋没土を切り込んで墓坑を掘削している。平面的に見ると円形の竪穴住居の西側に偏って墓坑を設定しており、Aラインより南側では、墓坑を平面的に検出した訳ではないが、墓坑の掘削はほとんど行われず、竪穴住居埋没土上面を若干ならす程度で石室床面としている可能性がある。この場合、基底石の掘り形は後の盛土によって基底石を安定させるまでの簡易な掘り形であったものと推定され、玄室東壁の最南の基底石が不規則な設置状況であることも、その便宜性を反映しているものと評価できる。

羨道部は基底石が遺存しないため、接地状況は明かでないが、竪穴住居の平面プランからは外れており、玄門部付近を境として南への傾斜がきつくなる旧地形が復元できることから、盛土を行った後に掘



第6図 北原3号墳墳丘基底面実測図

り形を掘削して石積みを行った可能性が高い。推定域内ではあるが、この際の盛土を基底石安定後の盛土と区分して基底盛土と仮称する。

基底石が裏込を含めて完全に安定した後、どの断面にも堅く締まった黒色土が厚さ10cm程度で一様に堆積している。これは奥壁裏では墓坑の上面を完全に覆い、またAラインでは墓坑内の基底石裏込上面に流入する状況で確認できることから、基底石の安定後に第1回目の墳丘盛土として石室周辺を全体に覆ったものと推定される。

黒色土の下位には石室の北側および西側に幅70cm、深さ35cmの断面方形の弧状に巡る溝状遺構が確認できた。北側の溝はBライントレンチの西壁で掘り形が見られないことから、長さ3mほどで収束するものと判断できる。また西側の溝は延長4.5mを検出し、南にさらに延びている。両溝の間には約2mの間隔がみられる。東側では平面的に検出することはできなかったが、Cラインの周濠に切られる落ち(8層)、Aライン東側の攪乱穴の直ぐ東にみられる不規則な落ち(9層)がこれに対応するものと思われる。この溝は当初竪穴住居に付属する排水溝とも考えたが、平面的に見て北側溝と竪穴住居の掘り形が接近しすぎていること、またBラインの北側断面で竪穴住居の上面を覆う流入土を切り込んで溝を掘削していること、溝の埋土が堅く締まった土であり、意図的に締めながら埋戻していると推定されること等によって、古墳の築造に伴って掘削されたものと判断した。これを墳丘基底溝とする⁽³⁴⁾。

墳丘基底溝は先の黒色土の盛土以前に掘削され、また堅く締めて埋め戻されている。この機能については推定する確実なデータはないが、基底石設置までの工程は短期間内に行われたものと思われ、墓坑の掘削土は墳丘南側の基底盛土に転用されたものと考えられる。しかし墓坑自体が元来竪穴住居の窪みを利用しているために、墓坑掘削土のみでは多くの土量を確保できていないであろう。これを補うために墳丘基底溝を掘削し、基底盛土に使用する土量を確保したとみることができよう。溝と溝の間に約2mの間隔が開いているのは後の石室石材の搬入通路確保のためと考えられる。溝の埋め戻しは基底石の裏込に併せて行われたものであろう。

基底石の設置まで終了した段階で先の黒色土が石室以外の全体に盛られる。この土は周濠を掘削して得た土と考えられる。ただし、周辺の地山には黒色系土壌は発達しておらず、この層序が上記の墳丘基底溝や基底石掘り形埋土との関係からみて、旧地表ではないことが明かである以上、何らかの土壌改良を行った可能性が高いといえる。これは単に堅く締まっているという感覚的データのみでなく、盛土堆積の整合性から判断できる点と、また黒色土中に、周辺の地山土(黄色土)がほとんど混在しないことから見ても妥当性が高いものである。

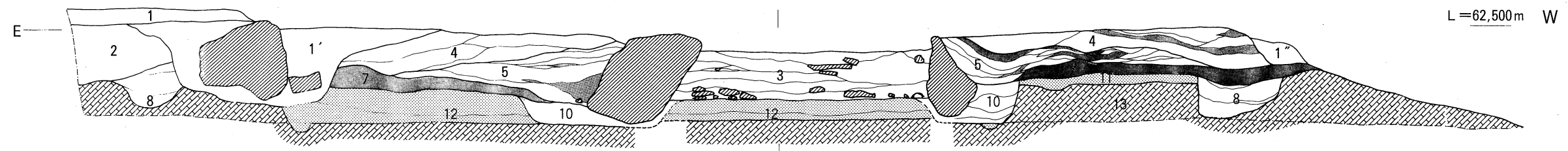
黒色土の上位には細かい単位で黄色土・黒色土・灰色土などが交互に盛られている。この交互層は下位の黒色土ほどの堅さはないが、非常に締まりのよいあり方をみせる。基底石に近い部分では石の傾斜に沿ってそれを覆うように土が盛られている状況が観察でき、さらに基底石掘り形の裏込部分では一旦窪みが見られることから、相当叩き締めているものと考えられる。この交互層は層厚10~20cmを測る。

交互層の上位には層厚10cmほどの黄色系土が一様に盛られる。この層より上の盛土は単位も粗く締まりがないことから、黄色系土の下面を盛土工程におけるブランク面と位置づけられ、それより下位の盛土を一次盛土、上位の盛土を二次盛土とする。ブランク面は土層観察から側壁の2石目の構築時の面と考えられる。側壁側ブランク面の側壁石裏面形状に沿う傾斜は、2石目を積む際の構造的な必要性がその要因と考えられる。これは一次盛土と二次盛土の時間的な連続性を示しているものであろう。

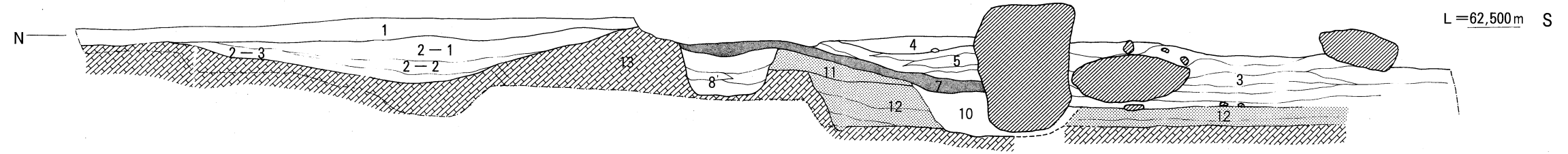
以上の墳丘盛土等の観察から、墓坑掘削→墳丘基底溝掘削→(基底盛土)→基底石設置→基底石裏込+墳丘基底溝埋戻し→黒色土盛土→一次盛土→側壁2石目石積→二次盛土の構築手順が復元できる。

墳丘土層一覽表

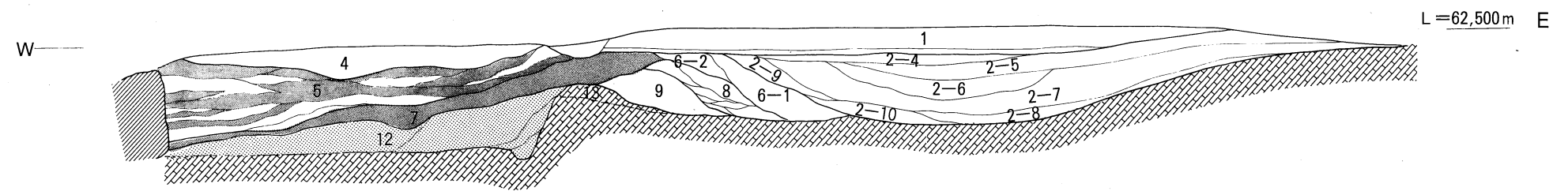
番号	層名	ライン	特徴
1	表土・攪乱層	A	畑耕作土の下位に、石室に使用したと思われる大形石材・石臼を含む攪乱穴がある ⁽¹⁷⁾ 。
		D	周濠埋土上面の整地土 ⁽¹⁷⁾ 。
2	周濠埋土層	A	断面東端で攪乱穴に切られる茶褐色土層。締まりが悪く、近世の染付片等を含む。
		B	上層黒褐色土(2-1)、中層暗茶黒色土(2-2)、下層暗黄茶褐色土(2-3)。中～下層で須恵器片多数出土。
		C	2-4は黄褐色土。2-5は黄灰褐色土。 2-6は淡茶褐色土。2-7は黒褐色土。 2-8は灰黒褐色土。2-9は濁茶褐色土。 2-10は暗茶褐色土。2-7以下に須恵器が多い。
		D	締まりの悪い黒褐色土。
3	石室内埋土層	A・B	上位は灰色系。上から4層目以下が黒色系。黒色系土層中には炭化物が混じる。
4	2次盛土層	A	西側は厚さ10cmほどの黄色系土層を盛った後に、黒色層・灰色層・黄色層の3～5cm単位の交互層が見られる。東側は黄色系、茶褐色系の大きな単位の盛土。
		B・C	黄灰褐色土。
		D	上位に黒色土。下位に茶褐色系の大きな単位の盛土。墳丘基底溝の上位に20cm大の礫が2段積まれる。
5	1次盛土層	A・B	灰色系・黄色系・黒色系の交互層。硬く締まる。
		C	黒色系を多用する交互層。
		D	礫より内側に灰色系・黄色系・黒色系の交互層。硬く締まる。
6	その他の盛土	C	6-1は暗茶褐色土。6-2は濁茶褐色土。墳丘裾部の盛土層か。
7	黒色土	A～D	硬く締まる黒色土。須恵器片を含む。
8 (9)	墳丘基底溝埋土	A～D	灰色系と黄色系の交互層。硬く締まる。Cラインでは明確な肩を形成しない。9層もこれに含まれる可能性が高い。
10	基底石裏込土	A・B	主に茶褐色土で一度に埋める箇所が多いが、Aライン西側では黄色系を混じえて細かい単位で埋める。
11・12	弥生期包含層 竪穴住居埋土	A～C	Aライン西側およびBラインで、包含層(淡茶褐色土)があり、その下位に茶褐色土の竪穴住居埋土を認める。
13	基盤層	A～D	明黄色を呈す花崗岩風化土壌。やや、粘性を帯びており、比較的均質。



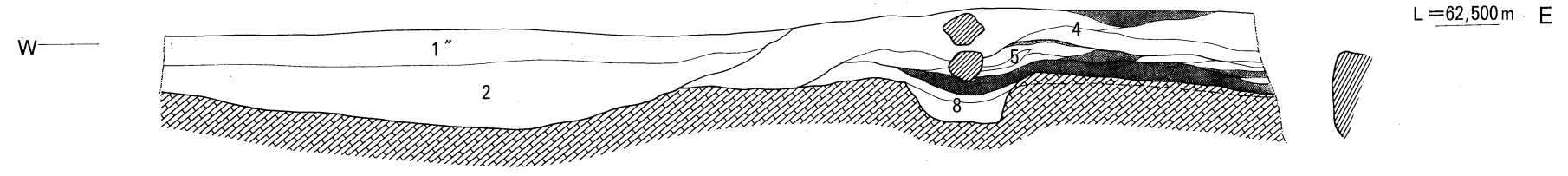
Aライン断面



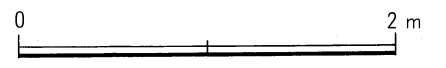
Bライン断面



Cライン断面



Dライン断面



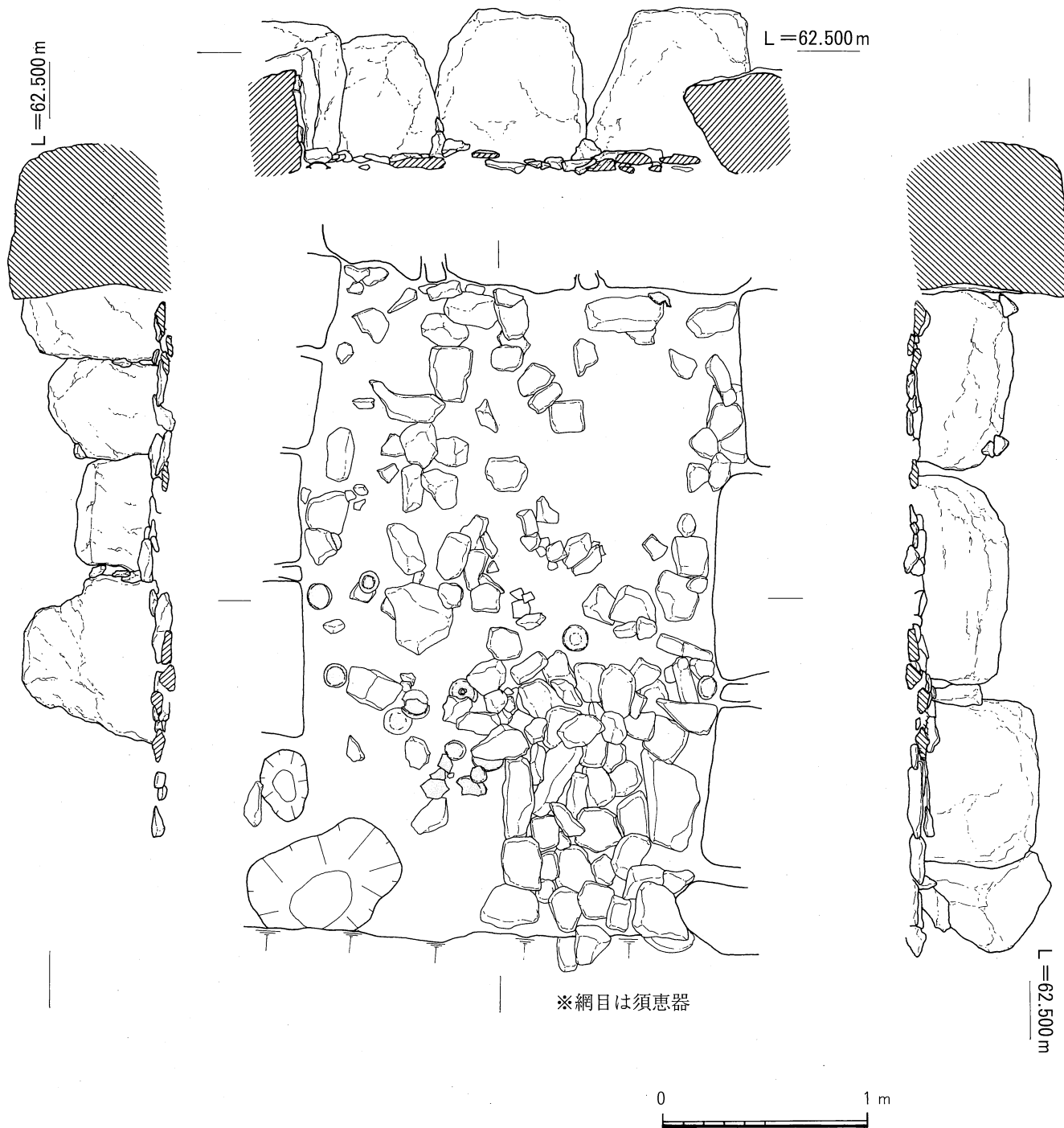
第7図 北原3号墳墳丘断面図

(2) 石室 (第13図)

a. 石室プラン

横穴式石室は1基で墳丘中央に築造される。羨道部は滅失するが、開口方向は遺存部から判断する限り、S-30° -Eで概ね南方向である。

奥壁は厚手の花崗岩塊石を縦に3石並べている。中央の基底石は横70cm、縦100cmを測る。厚みは60~70cmである。



第8図 北原3号墳石室実測図

西壁は南側の抜き取り穴から想定される小基底石を含めて、5石で構成される。奥壁側から1, 2, 4石目は石を縦長に使用し、3石目は55cm四方の方形塊石を据えており、上端はこの3石目部分が25cmほど周囲より下がっている。また遺存しない5石目も抜き取り穴から小形石と推定されることからこの部分も周囲より下がっていたものと推定される。以上の西壁基底石ラインは2,3石目でやや外側に膨れているが、これは意図的なものではなく、元来直線を意識したものと考えられる。

西壁の5石目の抜き取り穴の南には75cm×50cmほどの別の抜き取り穴がある。これは1～4石の基底石ラインより内側に迫り出しており、袖石の痕跡と推定される。後述する礫敷がこの部分において欠落していることから、その範囲が袖石の基底ラインと考える。ただし、抜き取り穴の上部には調査当初、60cmほどの塊石が落ち込んでいた。塊石除去後、若干の攪乱層が堆積しており、その下位に別の抜き取り穴が検出された。したがって、この塊石は後の攪乱によって袖石抜き取り後に落ち込んだものと判断している。

東壁には4石の並びが見られる。1～3石までは花崗岩塊石を横に使用しているのに対して、4石目は長さ150cmもある板状の花崗岩を縦に使用し、またその小口部を壁面に使用している。この変則的な使用は、墓坑設定の際に説明したように、元来の竪穴住居の掘り形を利用しているために、便宜的な石材使用が可能であったものと推定されるが、大形石の小口部を縦に使用していることは、西壁の袖石に対応して東壁の玄門石としての意味があったものと考えられる。石の上端が玄室側壁基底石の上端と揃っていることから、明確な玄門立柱とは異なるが、それに類する意味合いを持たせたものであろう。

以上にに基づき、石室の規模を計測すると、玄室長さは2.9m、奥壁幅1.95m、中央幅2.05m、復元前壁幅1.93mの右片袖式横穴式石室となる。羨道は延長0.3m分を検出したにとどまり、羨門部は滅失する。

b. 床 面

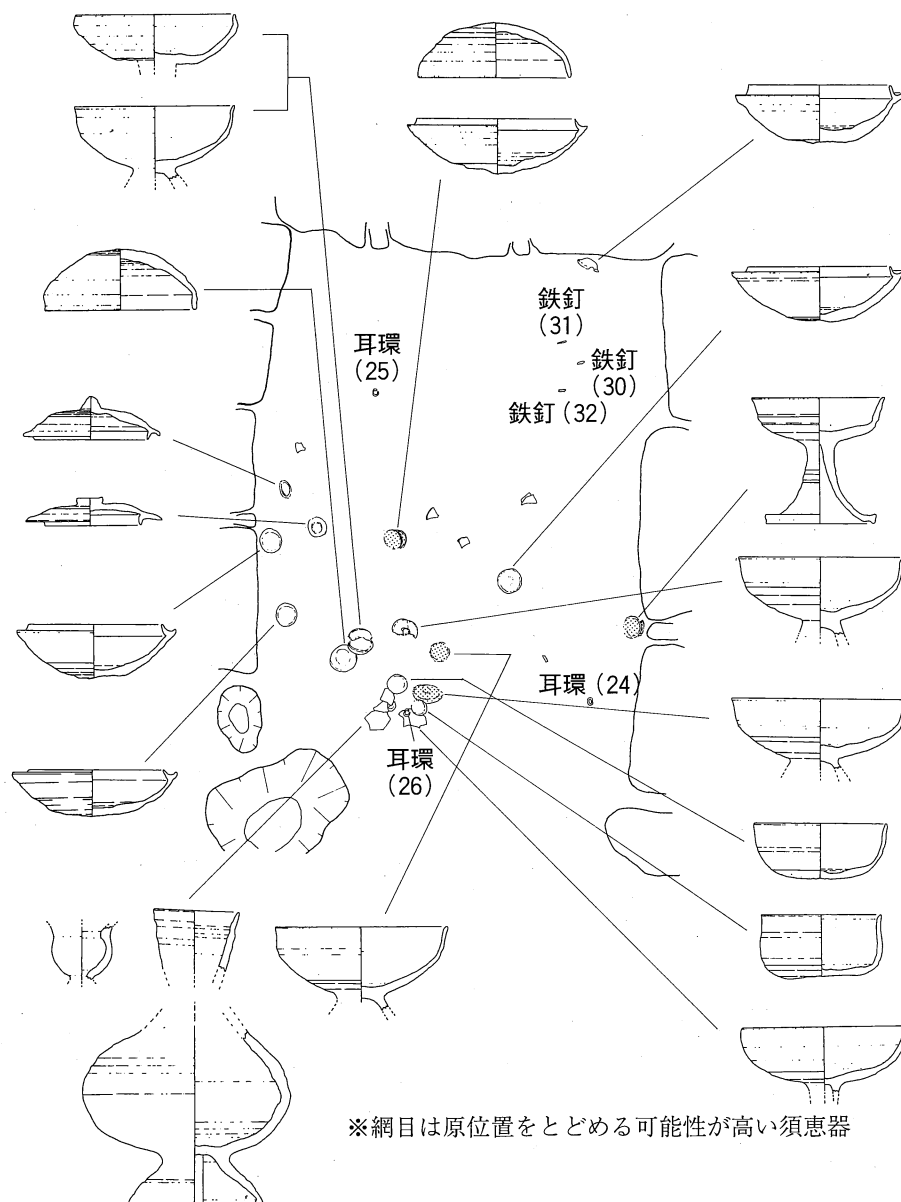
石室床面には20cm～50cm大の花崗岩角礫からなる礫床が認められた。礫床は玄室の奥壁寄りほど粗く、玄門部付近では密に認められる。後に述べる遺物の出土状況から見ても、奥壁付近は攪乱を被っている可能性が高い。ただし、玄門部付近の礫床は両側に細長の石を並べており、追葬時の棺台として使用された可能性が高く、棺台の石は奥壁寄りの礫床を転用したことも考慮する必要がある。全体的な礫の出土量から見ても、初葬段階で全面に礫敷きしたものが、追葬段階で一旦乱され、また盗掘等の攪乱によって奥壁寄りがさらに乱れたものと考えられる。

礫床のみでは追葬の回数や棺配置を推定することは難しいが、奥壁前面東の石室主軸に直交する方向で置かれる長さ50cmほどの柱石は周囲より高い点と、位置関係から棺台であった可能性が考えられる。

なお、玄門部付近には仕切石は存在せず、追葬時の棺台石がまだ南に延びるものと推定されることから、羨道部において仕切石が存在するか、あるいは元来存在しなかったかいずれかである。

c. 遺物出土状況

床面からは多数の須恵器が出土した。器種は坏、碗、無蓋高杯、台付長頸壺がある。これらは、西壁袖石前面にある程度まとまって分布するが、攪乱等によって必ずしも原位置をとどめているとは言い難く、セットを抽出するのは困難である。その中で、攪乱を受けているとは考えられない礫床の石に覆われて破損する須恵器は少なくとも盗掘段階での移動は考慮する必要はなく、追葬時の礫床の再編によって原位置をさほど移動することなく遺存したものと考えられる。これに該当する須恵器は、第10図1・3の坏蓋・坏身および18の無蓋高杯杯部である。前者は玄室西側の中央付近で大形礫の下位に押しつぶ



第9図 玄室内遺物出土状態

された状態でセットで出土し、須恵器の下位には板状の礫が敷かれていた。後者は玄門部の棺台に転用された塊石の下位に破碎された状態で出土した。その下位にはさらに礫が存在した。このように重層的に遺物を検出できたのはこの2点のみであり、ほかは原位置をとどめている根拠に乏しい。なお、14の無蓋高杯は東壁に接して出土したが、脚柱部が玄門部棺台石に固められた状態で出土していることから、これも原位置をとどめている可能性が高い。

須恵器以外の遺物は、玄門部のやや玄室寄り、銀環が2点出土しており、棺台で示される追葬時の被葬者の装身具と判断される。金環は玄室西側の奥壁寄り、1点出土している。原位置を留めているかどうかは不明である。また、石室埋土上層では鉄器が5点出土している。うち2点は鉄釘の頭部片である。床面では同様に鉄釘が玄室東側の奥壁寄り、1点出土している。玄門部では図化しえない鉄片が出土した。

玄室埋土は精査したが、玉類は1点も検出することができなかった。

以上の遺物出土状況は、劣悪ながらも玄室内の棺体配置をある程度反映しているものと考えられる。

出土遺物の特に須恵器の形式的位置づけを踏まえ、後述する。

(3) 出土遺物

a. 玄室内須恵器（第10図）

第15図1～23は玄室内より出土した須恵器である。出土状況は前節で述べたように、攪乱が著しく、追葬単位の資料を抽出することは困難である。以下、器種ごとに説明する。

坏蓋（1・2）

口径12cm程度の坏蓋2点。1は下半2/3が回転ナデで上半部はヘラ切り後に不整方向ナデで平滑化する。2は口縁部が強いナデによりやや内傾する。上半部はヘラ切り後不整方向ナデにより平坦化する。

坏身（3～7）

3, 4は口径14～15cmで、器高はさほど高くない。かえりの立ち上がりは短く、受部は外には膨らまない。3は1と胎土・色調が共通し、セットであった可能性が高い。底部はヘラ切り後に不整方向ナデがみられる。

5～7は口径13cmほどで、器高がやや高くなるもので、かえりの立ち上がりは短い、受部が外側に膨らむ。底部は6がヘラ切り後に不整方向ナデを施し平滑化を図っているが、5, 7はナデが弱く、未調整に近い。

碗蓋（8, 9）

上端部につまみをもち、扁平な体部にかえりが付属する、口径11cmの蓋である。つまみの形態は8が宝珠タイプ、9が扁平タイプである。9は受部が長い。8は体部上半を回転ヘラケズリ、9は上半部まで回転ナデで、回転による沈線施文がある。

碗（10, 11）

10は体部下半が丸く口縁部がやや外側に開く形態。11は底部が平坦で口縁部が直立する形態である。10は体部中程、11は体部下半に浅い沈線が巡る。いずれも下半部は回転ヘラケズリ調整で、11はヘラ切り後不整方向ナデを施す。8, 9とセットになるものと思われる。

底部片（12, 13）

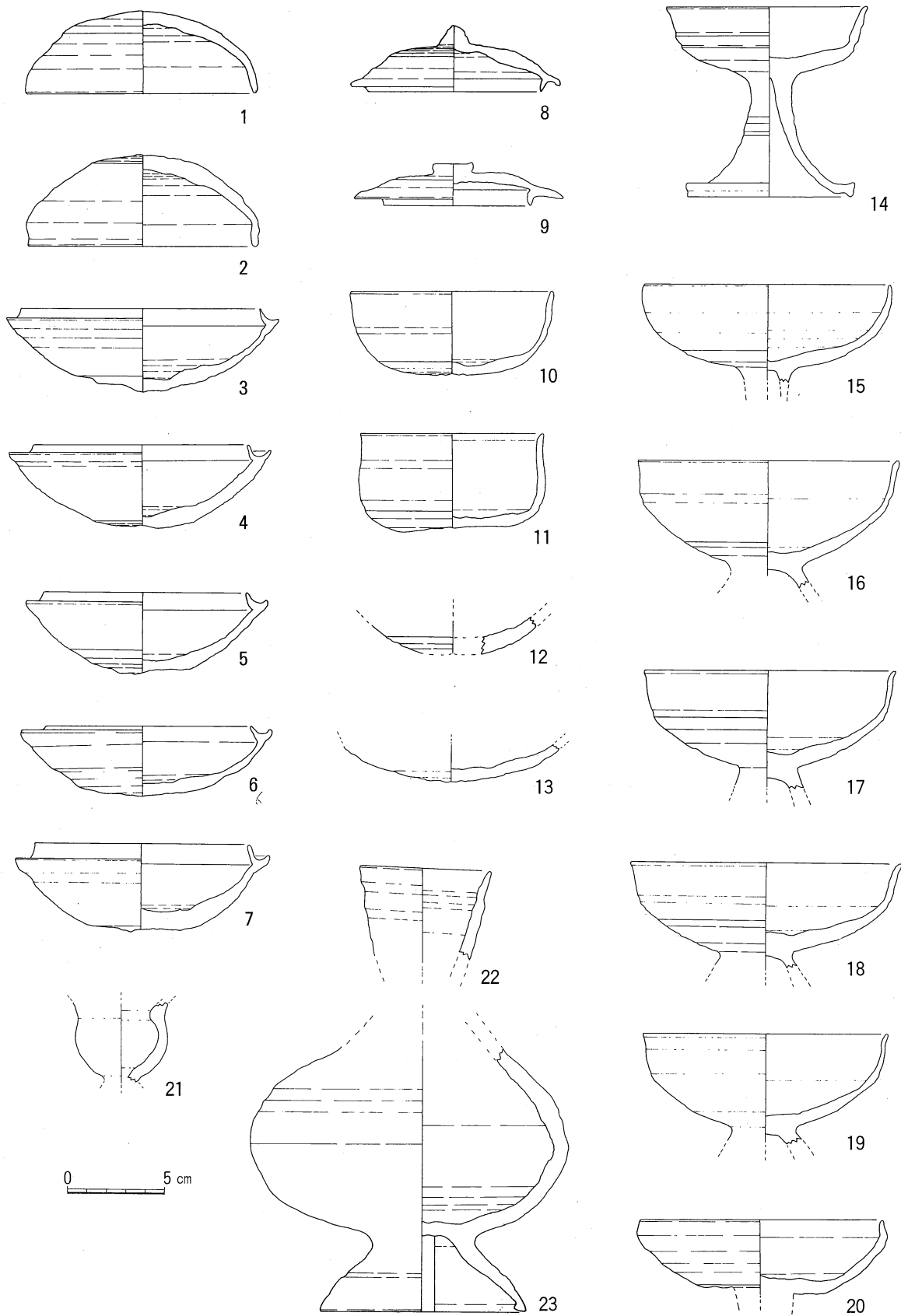
坏、碗のいずれかの底部片と思われる2点である。12は回転ヘラケズリをとどめ、13は不整方向ナデを認める。

高杯（14～20）

14は口径10.3cm、器高10.0cmの完形品。杯部は屈曲して斜上方に立ち上がり、外面に2条の稜線が見られる。脚部は無透で中程に2条の沈線、脚端部は強く開き、内傾の端面をもつ。全体に自然釉がかかり、黒色砂粒を胎土中に含む。

15～19は口径13～14cmの杯部をもつもので、脚部は遺存しない。破片も存在しないことから、本来杯部のみで副葬されたものと思われる。15は丸味のある体部の下半を回転ヘラケズリ調整するもので、細い脚部が付属する。16～19は上半部が緩やかに屈曲して斜上方に立ち上がり、口縁端部を外側につまみ出すもので、杯部中程に浅い沈線を巡らせている。いずれも脚部の付け根が大きく開いており、脚部が短い形態と思われる。

20は屈曲する位置が低く、上半部が斜上方に直線的に開いた後、口縁端部が内側に強く屈曲するもので、全体回転ナデ調整を施している。脚部痕跡は小さく、細い脚部が付属するものと思われる。



第10図 玄室内出土須恵器実測図

その他 (21~23)

21は玄室内から単体で出土した子持器種の小壺である。該当する器種が玄室内、周濠ともにみられないことから、単体で副葬されたものと思われる。

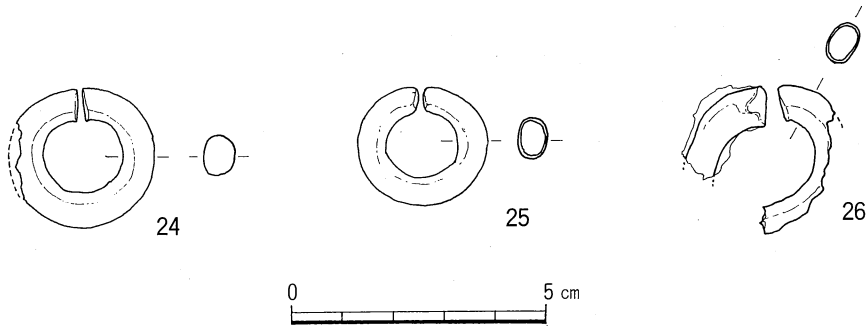
22は長頸壺口縁部か、あるいは瓶の口縁部と思われる。口縁部付近に2条の浅い沈線が巡る。

23は台付長頸壺の体部片である。やけ歪みで体部が変形する。体部は玉葱形で肩部付近に強いナデによる凹線が巡る。体部下半は回転ナデ調整。脚台部は短く、直線的に開く形態で、端面は内傾する。

b. 玄室内金属器 (第16・17図)

装身具 (24~26)

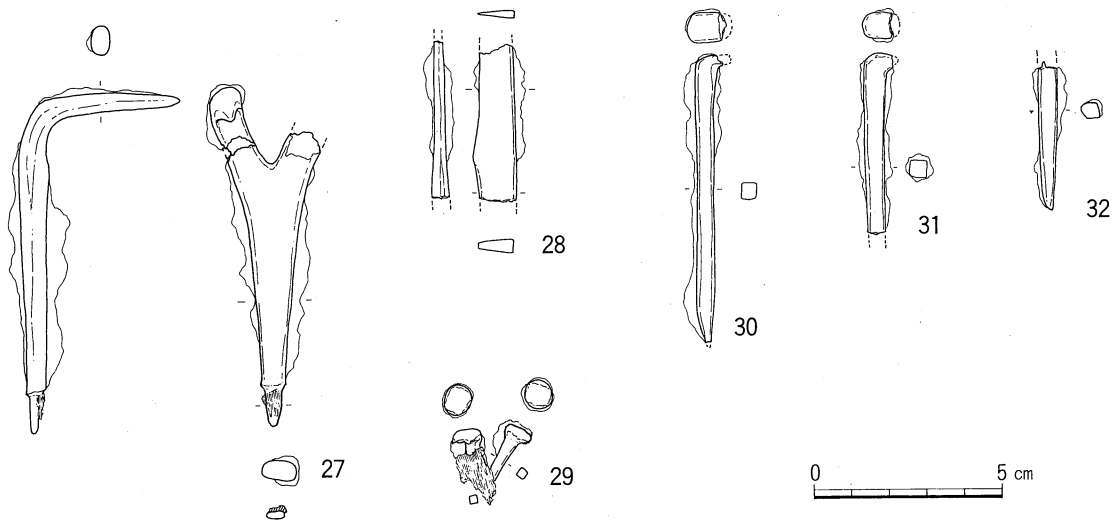
金環1点と、銀環2点が出土した。25は直径2.5cmの銅地鍍金の金環である。断面はやや扁平気味で挾部は丸く収める。24は直径3.0cmの中空銅地鍍銀の銀環である。断面は円形に近い。挾部は平坦面をもち体部に若干バリ状に張り出す形態を有す。26は25と同様の銀環で、遺存状態が悪い。断面は扁平気味。



第11図 玄室内出土耳環実測図

鉄鏃 (27)

27は先端が二股になる鉄鏃で、周濠上層から出土している。一方の先端が欠損する。先端から1/3ほどの位置で先端部が折り曲っている。元来意図的に折り曲げられ、石室に副葬されたものが、盗掘等により拡散したものと考えられる。全長は12.4cmで先端から4cmほどが二股部である。やや扁平で厚みの



第12図 鉄器実測図

ある鍔身から先端部に向かって次第に尖る形状を呈す。頸部は同様に厚身で、関部に向かって緩やかに幅が狭くなる。基部は長さ1.0cmと短く、表面の一部に木質が遺存する。

刀子 (28)

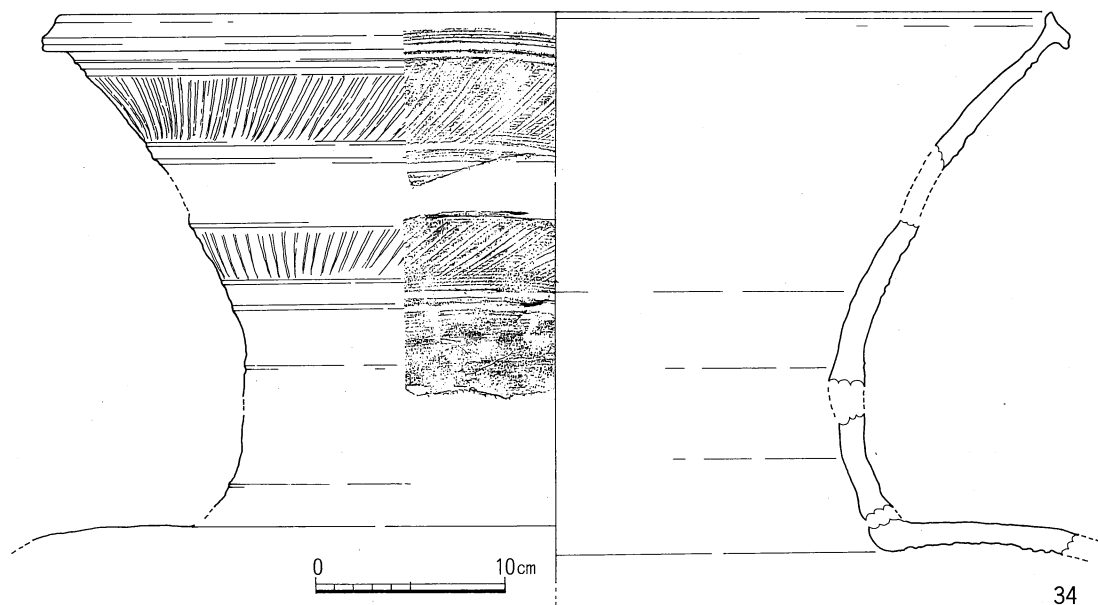
28は玄室の西側埋土中より出土している。下半が頸部で両側縁を面取りする。上半は幅が狭く、左側のみ刃部を形成する。

鉄釘 (29~32)

29は小形の鉄釘の2点が錆着したもので、表面に棺材痕が錆化して遺存する。頭部は丸く作出し、釘身は一辺0.2cmの断面正方形で、極めて細い。30~32は大形の鉄釘で、釘身断面は一辺0.4cmの正方形、頭部は一方向に折り曲げて作出する。ほぼ完存する30は、長さ7.6cmをはかる。

c. 盛土層・周濠出土遺物 (第13・14図・図版)

35・36は玄室北側の墳丘盛土層中より出土した須恵器である。35は口径15.2cm、器高4.1cmの坏身で、玄室出土のものに比べかえりの立ち上がりやや大きい。体部下半は回転ヘラケズリ調整。2/5ほどの破片である。36は無頸壺で3/5ほどを残す。胴部最大径14.8cm、器高8.6cmをはかる。やや肩が張る形態を呈し、体部下半は回転ヘラケズリ調整。



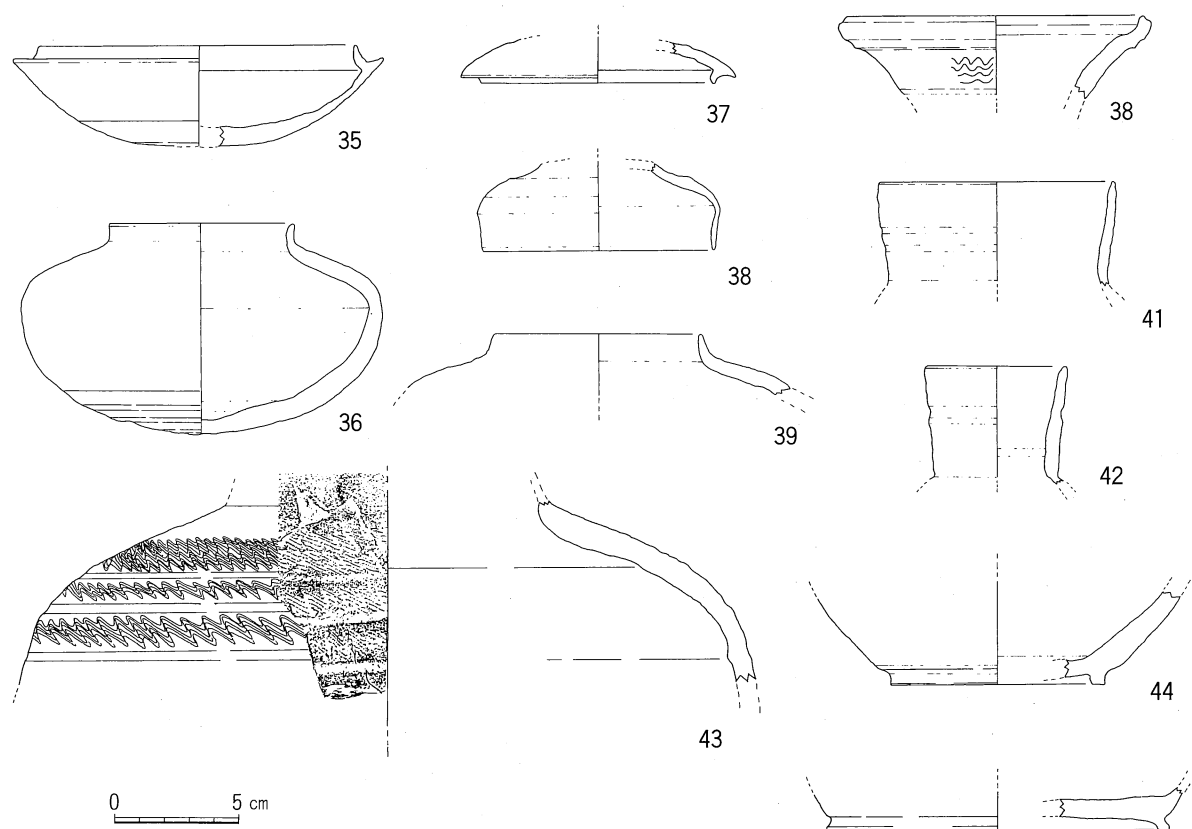
第13図 周濠出土須恵器実測図

37~43および第13図34は周濠出土の須恵器である。すべて石室開口部と反対の墳丘北側で出土している。37は口径11.2cmの坏蓋である。短いかえりをもち、丁寧なナデ調整を施す。38は無頸壺の蓋と思われる。口径9.5cm、器高3.8cmをはかる。2/5ほどの破片。39は大形の無頸壺口縁部。口径8.5cmをはかる。40は脛口縁部である。ラッパ状に開く頸部に屈曲して短く内彎する口縁が付属する。端面は厚手のまま面取りする。頸部外面に櫛描波状文、直線文を施す。41・42は台付無頸壺等の口縁部と思われる。外面に強いナデによる凹線文を巡らせる。43は壺の胴部片。胴部最大径は30cm以上をはかり、上半に沈線で区画する櫛描波状文帯を3帯巡らせる。内面は丁寧なナデ調整。第13図34は大形壺の口縁から胴部上半までの破片である。ほかに胴部片も多数出土しているが接合が不十分のため図化していない。口径は52

cm、頸部高さ26.0cmを測る。ハの字に開く頸部に端面拡張の口縁部が付属する。頸部外面には沈線で区画した斜行沈線文帯が2帯巡る。口縁端部は強いナデにより凸線を作成する。胴部は外面は丁寧なナデ調整で、内面は青海波紋の叩きが残る。

44・45は周濠埋土上層より出土した奈良時代の須恵器坏である。

図版10（下段）は周濠および周辺攪乱層より出土した鉄滓である。総重量260gをはかる。



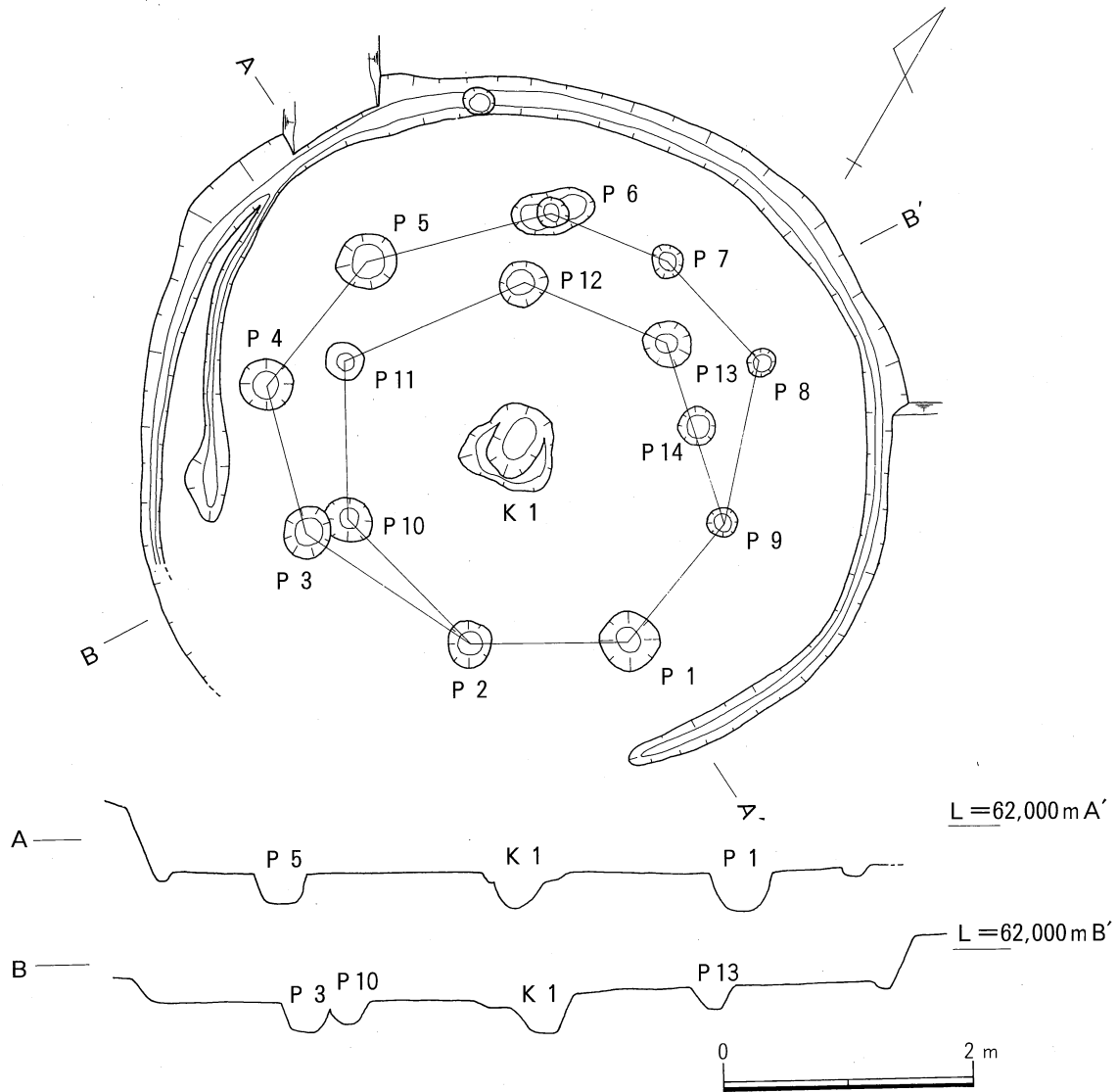
第14図 周濠・盛土層出土須恵器実測図

第3節 北原遺跡

古墳墳丘の断面観察を行う過程で、墳丘下部に別遺構が存在する可能性に気づき始めた。それは当初想定した墓坑の掘り形があまりにも基底石から離れた位置にある点、また掘り形底面が平坦で、外周に小溝がめぐる点などである。石室調査終了後墳丘盛土の除去を行ったところ、円形の掘り形内に柱穴も検出され、竪穴住居が存在することが明らかとなった。調査期間の制約があったが、古墳の周辺にも柱穴等の存在を確認し遺構の広がりを見ることができた。以下、古墳の下位で確認した竪穴住居について説明する。

(1) SH-01 (第15図)

直径6.2mの円形の竪穴住居である。南へ傾斜する緩斜面地につくられており北の山側では深さ40cmをはかり、谷に面する南側ではすでに掘り形を失っている。壁溝は南側の損壊部で途切れているが、本来は幅15~20cmで全周したものであると思われる。西側では一部で内側に派生する箇所があり、1回の立て替えが行われたものと考えられる。



第15図 SH-01 実測図

床面は平坦で、ベッド状遺構等は付属しない。床面中央に径70cmほどの楕円形土坑がみられ、深さ30cmの掘り形内に少量であるが炭化物の堆積が認められた。

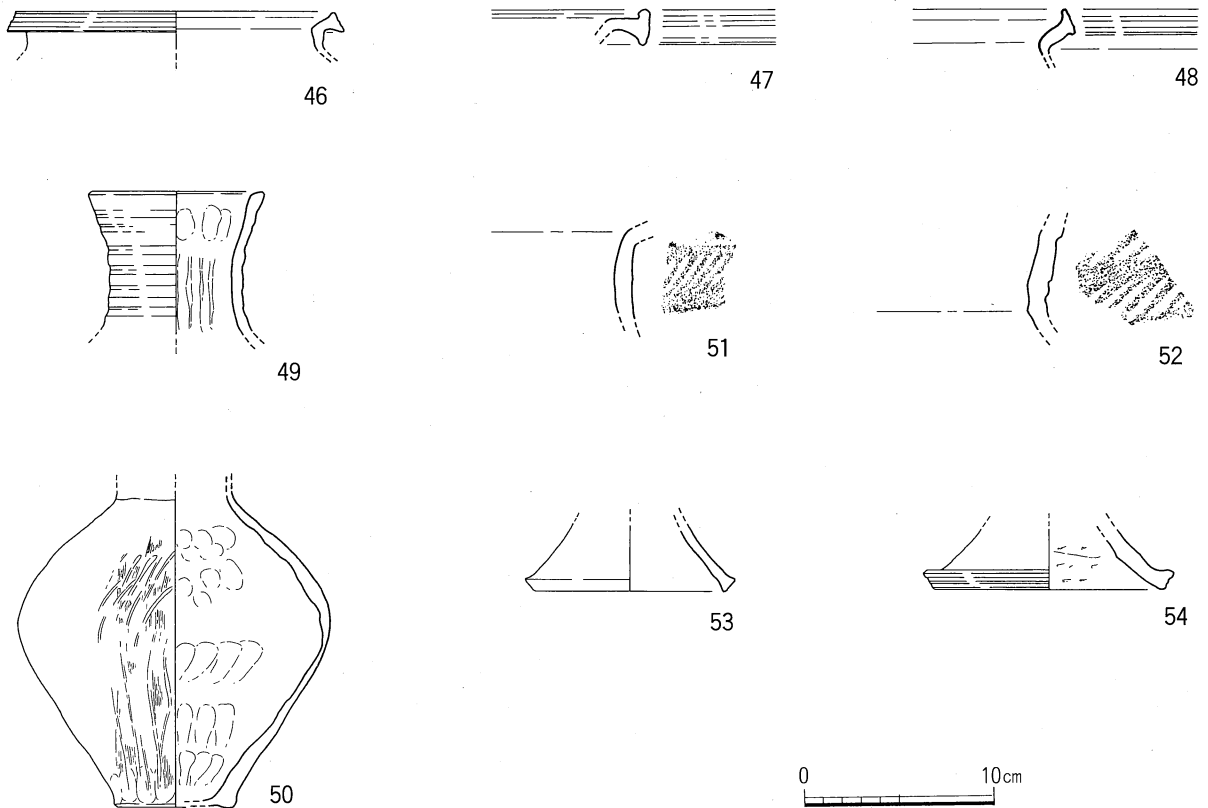
支柱穴は中央土坑を中心に一部重複しながら2重に巡っており、P3とP10の切り合いからみても、立て替えに伴って若干の拡幅があったものと考えられる。P1・P2・P9の3穴は新旧で共有されており、立て替え時の時間差はないものと思われる。

床面に張り付いた出土遺物はなく、多くが埋土中からの出土である。

(2) SH-01出土遺物 (第16図)

46~48は甕形土器口縁部片である。短く屈曲した口縁部端面を上下に拡張し、端面に3~4条の浅い凹線文を施す。46は口径17.0cmをはかり、47・48はそれ以上の口径と推定される。いずれも橙色系の粗い胎土で、砂粒を多く含む。

49・50は直口壺の口頸部片と胴部片である。同一個体ではない。49は8cmほどのやや外広がりの頸部



第16図 SH-01 出土土器実測図

外面に6条の凹線文を施すもので、端面はやや内傾する面をもつ。50は外面に縦方向の刷毛目を施した後、やや粗い篋磨き調整を加えている。内面はナデ調整で指頭圧痕が顕著。器壁は薄いヘラケズリは認められない。

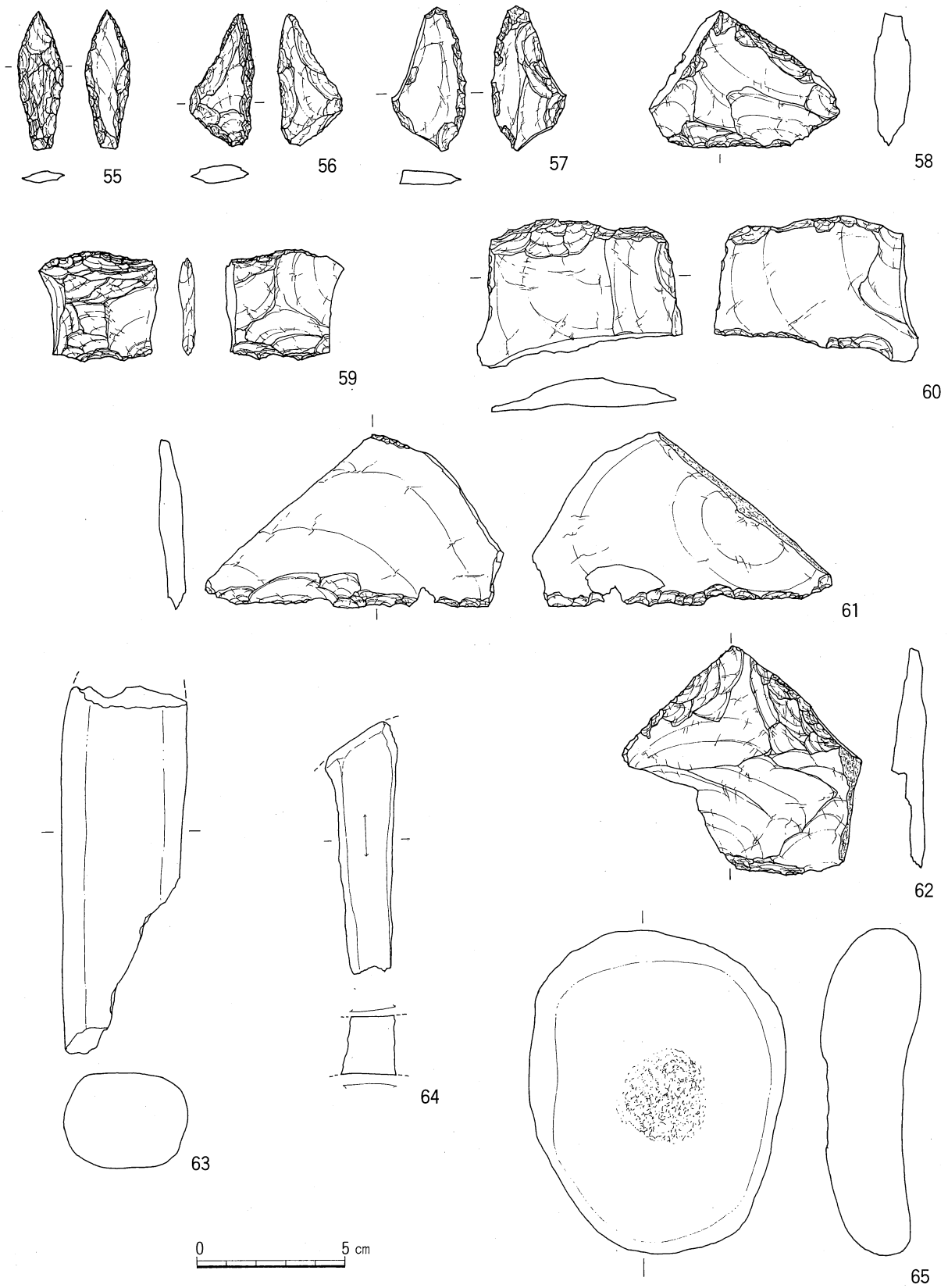
51・52は広口壺の頸部と思われる。斜行原体圧痕文を施している。53・54は高杯脚部片である。54は端面を拡張し3条の浅い凹線文を施す。内面は横方向のヘラケズリ。

55は長さ4.8cmの柳葉形の石鏃である。横幅7cm、厚さ0.5cmほどの左右に偏った横長剥片を素材とする。主要剥離面側から顕著な調整剥離を施して整形する。裏面の調整は浅い。56・57は幅5cmほどの横長剥片の周辺部に調整加工を施したもので、大きさから見て石鏃の未製品と推定される。いずれもサヌカイト製。

58～60・62は楔形石器である。59・60は平面方形で上下縁に顕著な階段状剥離および敲打痕が認められる。58・62は三角形ないし五角形の平面形を呈し、各辺に階段状剥離が顕著である。いずれもサヌカイト製。

61はスクレーパーで薄手のサヌカイト大形剥片の側縁に連続的な浅い調整剥離を施し付刃する。

63は幅4.2cm、厚さ3.2cm、長さ13cm以上の柱状片刃石斧の基部片である。淡灰色を呈した結晶片岩製。64は硬質砂岩製の砥石である。表裏両面に砥面をとどめる。65は砂岩製の敲石。



第17图 SH-01 出土石器实测图

第4章 ま と め

(1) 北原3号墳の石室構造について

検出した石室は最も重要な袖部の基底石が滅失し、また玄室も基底石しか残っていないことから、必ずしも明確な構造を把握できるわけではない。しかし、礫床や副葬された須恵器の出土状況から推定して、少なくとも袖部基底石のおおまかな形状は復元できる。

石室の平面プランは右片袖である。左の玄門部には板石の小口面を縦に使用しており、立柱を意識しているが、袖を形成するには至っていない。これは6世紀後半に広く讃岐地方に広がった立柱を使用した玄門部構造⁽³⁵⁾を痕跡的に残したものと考えられる。

これに対して、右袖部は基底石の抜き取り穴から推定すると、塊石状の基底石を使用している可能性が高い。羨道部が滅失しており、三豊郡豊中町延命古墳⁽³⁶⁾に見られるような畿内の要素をもつ玄門形態か、あるいは塊石を使用しながらも、突出させて当地方に特徴的な玄門形態を採るか、判然としない。

玄室の長：幅は1.45：1 と、同時期の石室に比べると幅が広い⁽³⁷⁾ことは特徴として抽出できる。

石積形態としては、奥壁に一石の大石を据えるものではなく、ほぼ同等の大きさの3石を縦長にして並べている点、側壁基底石は奥壁と高さを揃えて横長の塊石を使用している点が特徴である。前者については石材の面から奥壁に相当する石が確保できなかったために小形石を縦長に使い、便宜的な構築を行っている可能性がある。しかし、後者のような側壁と奥壁の上面が揃っている点と無関係でない可能性もあり、2号墳の調査や、善通寺地域のほかの調査例を踏まえて検討すべき課題である。

(2) 北原3号墳の所属時期と追葬期間

北原3号墳は立地的に見て丘陵尾根上に近接する北原1・2号墳との関わりが深いものと思われる。2号墳は今後の調査に期待される場所であり、ここでは3号墳の出土遺物とその出土状況から、築造の時期と棺体の配置、追葬の期間等を検討する。

玄室より出土した須恵器は1と3の坏のセットが田辺編年のTK209併行期に相当し、2・5～7まではTK217併行期と位置づけられる。8～11の椀のセットはTK217併行期ないしはその新相に相当する。実年代的には6世紀末～7世紀初頭頃の初葬と7世紀中葉頃⁽³⁸⁾までの追葬が考えられる。

また、墳丘盛土層中にはTK43併行期と考えられる坏(35)・無頸壺(36)が出土しており、流れ込みとも原位置とも判断はつかないが、築造時期の層位的上限となる。

床面における出土状況を観察すると、初葬段階と考えられる1と3は、本文でも記したように礫との関係から原位置を留めている可能性が高い。また、それより新しいと考えられる須恵器は、攪乱等によって分散するものがあるが、多くは西側壁袖石前面に置かれているものと推定される。これらのことから、玄室の東側に初葬棺が配置され、東側にはその後少なくとも1回の追葬があったものと思われる。また、玄門部付近には棺台と推定される石の並びがあり、この位置にも追葬されている。したがって合計3体以上の棺が配置されたものと思われる。

初葬と推定した東棺は大形の鉄釘が伴っている。鉄釘が初葬段階で用いられるパターンは県内に多く知られている⁽³⁹⁾。耳環は、出土状況から見る限り初葬段階には装身されておらず、追葬時の被葬者に装身されたものと思われる。

最終追葬と考えられる玄門部の追葬には、出土した須恵器のうち椀形式の2セット、あるいはその内

の1セットがその際に副葬されたものと思われる。

(3) 副葬品からみた北原3号墳の意義

副葬品は玄室内から刀子・耳環が、周濠から鉄鏃・鉄滓が出土した。周濠出土のものは元来石室内に副葬されたものが盗掘等のため拡散したものと考えられる。

鉄鏃は先端が二股に分かれる雁股式の鉄鏃で、通常の後期群集墳から出土する長頸鏃は認められない。雁股式鉄鏃は畿内中枢部で7世紀初頭に出現する形式⁽⁴⁰⁾であり、畿内以外での出土例は少ない。周濠出土のために、元来当古墳に伴うかどうか、根本的な疑念は残るが、仮に当墳に伴うとすれば、最新形式を採用している点で興味深い。ただし、畿内の出現期の雁股式鉄鏃は鋒部が扁平のものであり、形式的に異なることから短絡的に解釈できるものではないが、いずれにしても、県内の後期古墳で一般的な長頸鏃の副葬が見られない点は区別されるべきである。

鉄滓は古墳から出土した事例としては県内では初例である。低地部の集落跡では近年の発掘調査により6世紀後半以降の出土例が増加しているが⁽⁴¹⁾、同時期に盛行する後期群集墳からは出土しない。ただし、三豊郡山本町大字財田所在の財田西古墳⁽⁴²⁾では明治年間に鉄床・鉄槌・鉄鋏等の鉄鍛冶関係の副葬品が出土した記録が残り注目される。

鉄釘は県内では10例の古墳出土が知られる⁽⁴³⁾。いずれも7世紀代の古墳であり、特に7世紀中葉から後半まで追葬される古墳が多く、終末段階の古墳の特徴として抽出できる。

このように北原3号墳から出土する副葬品は、通常6世紀後半代に築造された群集墳から出土する副葬品とは、明らかに組成が異なっている。県内で7世紀代に築造された古墳は鉄釘を伴っていることが多く、規模の大きな古墳を除くとそれまで一般的であった長頸鏃の副葬が欠落するなど、葬送儀礼上の画期を考える必要がある。その中で最新の形式の鉄鏃や、県内では類例がない鉄滓を副葬している点⁽⁴⁴⁾は善通寺地域に数多く分布する群集墳を考える上で重要な意味をもつ。

善通寺地域で多数分布する後期古墳は、これまでにあまり十分な発掘調査事例がない。玄室内に線刻画をもつ宮ヶ尾古墳は現在、保存整備に伴う発掘調査が進められており、調査成果が期待されるが、古墳時代後期以後のいわゆる巨石墳は善通寺地域では多くはない。三豊地方における母神山古墳群から大野原古墳群への巨石墳の系譜とそれに付随する小規模墳の消長、あるいは後の讃岐国府が所在した綾川水系における巨石墳の系譜などと比較すると、6世紀中葉の王墓山古墳を最後に首長墓系譜が途絶えた感が強い。扇状地上に立地し、腰高な後円部をとどめる菊塚古墳には大型の横穴式石室が埋もれている可能性はあるが、前方後円墳を採用しなくなった段階の大型墳は未発見である。しかし、丘陵部に分布する群集墳については、分布調査等によって確認されたものだけでも他地域を凌ぐ数量があり、弘田川・金倉川水系の可耕地を背景とした生産基盤は無視できない。

ところで市内仙遊町に所在する仲村廃寺は塔礎石の存在が知られる白鳳期の古代寺院である。これまでに川原寺式の八葉複弁軒丸瓦が出土している⁽⁴⁵⁾。これは外区に面違鋸齒文を施し、内区の立体感を残す古式の部類であり、県内の川原寺式軒丸瓦のうち元も古い形態に属するものである。したがって7世紀中葉から後半期には、中央政府との関わりの中でいち早く寺院を建立した地方豪族の存在が想定される。当墳を含めた善通寺地域の丘陵部に多数知られる小規模墳は、寺院建立を成しえた勢力の基盤を形成したものであることは間違いのないであろう。6世紀中葉以降に大型墳が途絶え、7世紀中葉～後半に寺院の建立に至るこの約1世紀間の勢力動向は、善通寺地域の小規模な後期～終末期古墳の調査事例が積み重ねられるなかで検討されるべき課題である。今回確認した北原3号墳の副葬品にみる特異性が、いか

なる解釈で帰納されるか、今後の調査に期したい。

(4) 北原遺跡の弥生集落について

今回検出した弥生期の遺構は、竪穴住居1棟と若干の柱穴等である。竪穴住居の南の地形は傾斜変換して谷に向かって下降しており、検出した遺構は北原1・2号墳周辺を中心として存在する弥生期集落の南縁辺に相当するものと考えられる。

立地は標高60～70mの南に面する丘陵緩傾斜地であり、広義の高地性集落に該当する。出土した土器は後期初頭に相当し、周辺の丘陵上の集落が廃絶する時期に合致する。善通寺市内で丘陵上の集落が出現するのは、標高60～70mの天霧山南麓に展開する月信遺跡が初現である。甕形土器口縁部に凹線文がまだ採用されず、少数の壺形土器口縁部にのみ凹線文が観察できる中期中葉段階の土器相である⁽²⁰⁾。月信遺跡南方の谷を挟んで、我拝師山・火上山山塊の北麓標高115mの緩斜面地には、吉原火上山遺跡が所在する。出土する土器は凹線文が発達する中期後葉段階の一群で、後期初頭の土器を一部含む⁽²¹⁾。以上の2遺跡は、いずれも包含層出土の遺物のみであり、集落の内容についての詳細は検討し得ない。しかし、丘陵地の集落については、中期中葉から後期初頭までの時間幅があり、遺跡によっても存続時期が異なっていることを確認できる。また、標高50m以下の扇状地では、矢ノ塚遺跡、西碑殿遺跡などの集落が同時に存続し、低地部に立地する旧練兵場遺跡においても中期末葉の竪穴住居が確認されている。このことは、縄文時代後期中葉以降においてもつばら低地部に展開した集落が、基本的にはその機能を存続させながら中期中葉以降において一部が丘陵地の選地を始めるものと考えられる。

丘陵地の集落が廃絶する時期は概ね後期初頭にまとまる⁽⁵¹⁾。後期中葉段階ではこれに替わって低地部の集落が多数出現する。当遺跡の集落は現資料では後期初頭期に限定される。今後の調査によって前後する時期の資料が出土する可能性があるが、基本的には今回検出した竪穴住居の時期をもって低地部へ移住している可能性が高い。

石器は柳葉形の打製石鎌が出土し、その未製品と思われる調整痕を残す剥片が2点見られた。石庖丁は出土していないが、楔形石器やスクレーパーがみられる。以上のサヌカイト製石器のほかに多数のサヌカイト剥片が出土しており、集落内で石器生産を行っている。ほかには柱状片刃石斧の頭部と刃部が欠損したもの、砂岩製の砥石、敲石が出土している。石庖丁が出土していないことは注意すべきかもしれないが、丘陵地の遺跡においても普遍的に石庖丁が存在することからすると、資料総数が少ないことに起因すると考えた方がよい。

ところで、調査地から直ぐ南の丘陵では銅鐸出土地とされる箇所がある。対象の銅鐸は多和文庫所蔵の扁平紐式6区袈裟襷文鐸で、北原シンネバエ鐸と称されている⁽⁵²⁾。高さ40.2cmをはかる。出土地については谷を挟んで東側の大麻山とする説もあり、真偽のほどは明かでない⁽⁵³⁾が、銅鐸出土地の近辺で弥生期の土器等が散布する事例が多いことから考えると、北原地区出土の妥当性を示す資料にはなり得る。

(注)

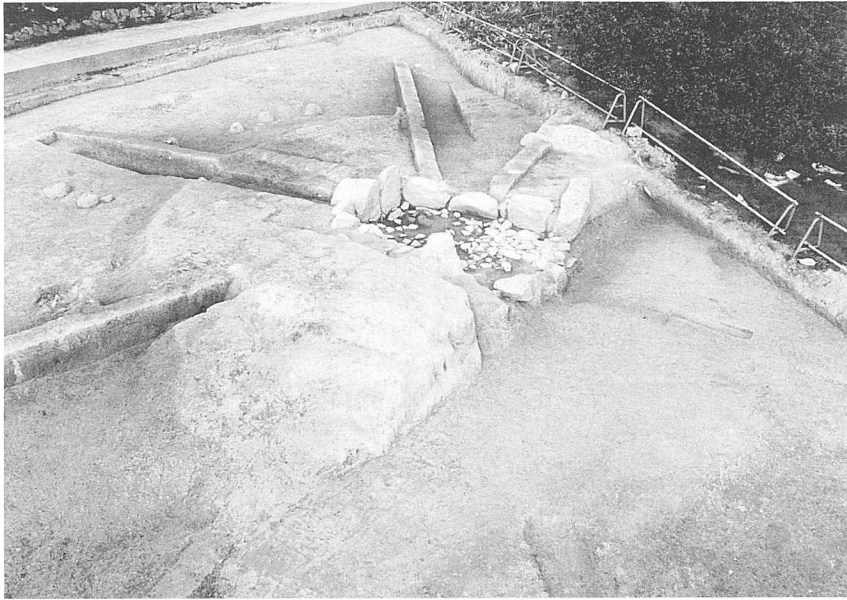
- (1) 北山健一郎「北原古墳」『香川県埋蔵文化財調査年報平成3年度』香川県教育委員会1992
- (2) 森下英治「観音寺善通寺線」『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅷ』香川県教育委員会1995
- (3) (1)に同じ。
- (4) 大谷伸一・森下英治「三条黒島遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報昭和63年度』香川県教育委員会・財香川県埋蔵文化財調査センター1989

- (5) 佐藤竜馬ほか「郡家田代遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報昭和63年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター1989
- (6) 片桐孝浩「縄文時代」『三条番ノ原遺跡四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第11冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター1992
- (7) 木下晴一「SR-03」『龍川四条遺跡四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第15冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター1995
- (8) 渡部明夫編『永井遺跡四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター1990
- (9) 北山健一郎「弘田川西岸遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報平成4年度』香川県教育委員会1993
- (10) 真鍋昌宏「A地区の調査」『稲木遺跡四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター1989
- (11) (8)に同じ。
- (12) 大久保徹也ほか『下川津遺跡瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊』1990
- (13) 宮崎哲治ほか「龍川五条遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財試掘調査概報平成元年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター1990
森下英治ほか「龍川五条遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財試掘調査概報平成2年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター1991
- (14) 森下英治「五条遺跡」『香川県埋蔵文化財調査報告平成5年度香川県土木部道路整備事業に伴う発掘調査報告集』香川県教育委員会1994
- (15) 藤好史郎編『中の池遺跡』丸亀市教育委員会1982
- (16) 岡 正憲「三井遺跡」『平成4年度多度津町内遺跡発掘調査報告書』多度津町教育委員会1993
- (17) 森下英治編『旧練兵場遺跡—平成5年度国立善通寺病院内発掘調査報告—』香川県教育委員会1994
- (18) 笹川龍一編『彼ノ宗遺跡』善通寺市教育委員会1985
- (19) 薦田耕作ほか『矢ノ塚遺跡四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター1987
- (20) 笹川龍一編『月信遺跡』善通寺市教育委員会1991
- (21) 岩橋 孝「吉原火上山遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報平成2年度』香川県教育委員会1991
- (22) 廣瀬常雄「西碑殿遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター1994
- (23) 小林行雄編『紫雲出山』詫間町文化財保護協会1965
- (24) (12)に同じ
- (25) 笹川龍一編『仙遊遺跡発掘調査報告書—旧練兵場遺跡仙遊I地区—』善通寺市教育委員会1986
- (26) 香川県教育委員会・善通寺市教育委員会『県道西白方善通寺線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』1988
- (27) 笹川龍一編『青龍古墳』
- (28) 笹川龍一編『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』1992
- (29) 香川県教育委員会『新編香川叢書考古編』1983
- (30) 笹川龍一編『仲村廃寺』善通寺市教育委員会1989
- (31) 香川県『香川県史13考古』1987

- (32) 國木健司編『生野本町遺跡』香川県教育委員会1993
- (33) 廣瀬常雄「金蔵寺下所遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センタ1994
- (34) 調査中に善通寺市教育委員会笹川龍一氏より、王墓山古墳においても同様な溝状遺構が検出された
とのご教示をいただいたが、十分な比較検討に至っていない。
- (35) 山崎信二『横穴式石室構造の地域別比較研究－中・四国編－』1984
- (36) (35)に同じ。
- (37) 東原輝明編『青ノ山8号・9号墳発掘調査概報』丸亀市教育委員会1984
- (38) 山田邦和「飛鳥・白鳳時代の須恵器研究の展望」『古代文化40－6』(財)古代学協会1988
- (39) 國木健司編『風呂谷古墳』三木町教育委員会1993
- (40) 飯塚武司「後期古墳出土の鉄鏃について」『東京都埋蔵文化財センター研究紀要5』(財)東京都埋蔵文化財センター1987
- (41) 三豊郡高瀬町大門遺跡
同郡大野原町柞田八丁遺跡
坂出市下川津遺跡
同市川津一ノ又遺跡
仲多度郡満濃町吉野下秀石遺跡 など
- (42) 香川県教育委員会「新編香川叢書考古編」1983
- (43) (39)に同じ。
- (44) 古墳から出土する鉄滓は、大澤正己氏が集成し、鍛冶技術集団との関係を指摘している。また、安川豊史氏は、美作の鉄滓出土古墳が数量的に多いことから、鉄滓供献は鍛冶技術集団との関係を前提とした、古墳祭式の一部と見ている。
大澤正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会1983
安川豊史「古墳時代における美作の特質－群小墳の動向と評価－」近藤義郎編『吉備の考古学的研究(下)』1992
- (45) (31)に同じ。
- (46) (20)に同じ。
- (47) (21)に同じ。
- (48) (19)に同じ。
- (49) (22)に同じ。
- (50) (17)に同じ。
- (51) (23)及び今井和彦「烏帽子山遺跡」『平成5年度坂出市内遺跡発掘調査報告』坂出市教育委員会1994
- (52) 矢原高幸「香川県下の銅鐸について」『香川県考古学会報告第1輯』1961
- (53) 松本敏三・岩橋 孝編『讃岐青銅器図録』瀬戸内海歴史民俗資料館1983

報告書抄録

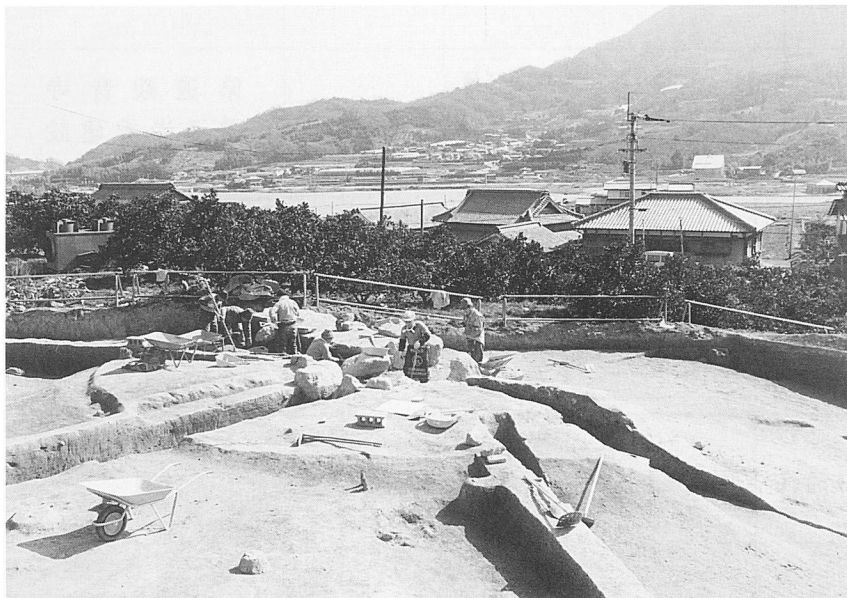
ふりがな	きたはら3ごうふん・きたはらいせき							
書名	北原3号墳・北原遺跡							
副書名	県道観音寺善通寺線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
編著者名	森下英治							
編集機関	香川県教育委員会							
所在地	〒760 香川県高松市番町2丁目1-1 NTT番町ビル							
発行機関名	香川県教育委員会							
発行年月日	平成7年3月31日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数	
47	6	41	なし	9	31	17	なし	
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡					
北原3号墳 北原遺跡	香川県善通寺市 善通寺町字北原			34° 12′ 30″	133° 46′ 00″	平成7年1月 ～3月	600m ²	県道観音寺 善通寺線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北原3号墳	古墳	古墳時代 終末期	横穴式石室 周濠		須恵器・耳環 鉄鏃・刀子 鉄釘・鉄滓			
北原遺跡	集落跡	弥生時代 後期	竪穴住居 柱穴		弥生土器・ 石鏃・スクレーパ 楔形石器・石斧 砥石・敲石		高地性集落 石鏃未製品	



北原 3 号墳全景（南より）



北原 3 号墳全景（西より）



発掘作業風景（西より）



石室全景（南より）



石室近景（南より）



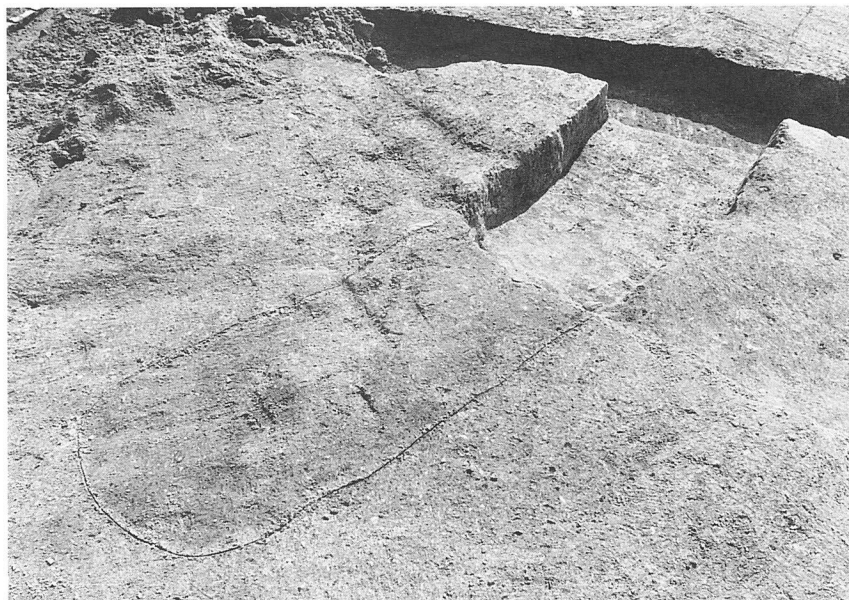
床面遺物出土状態（南より）



鉄器出土状態



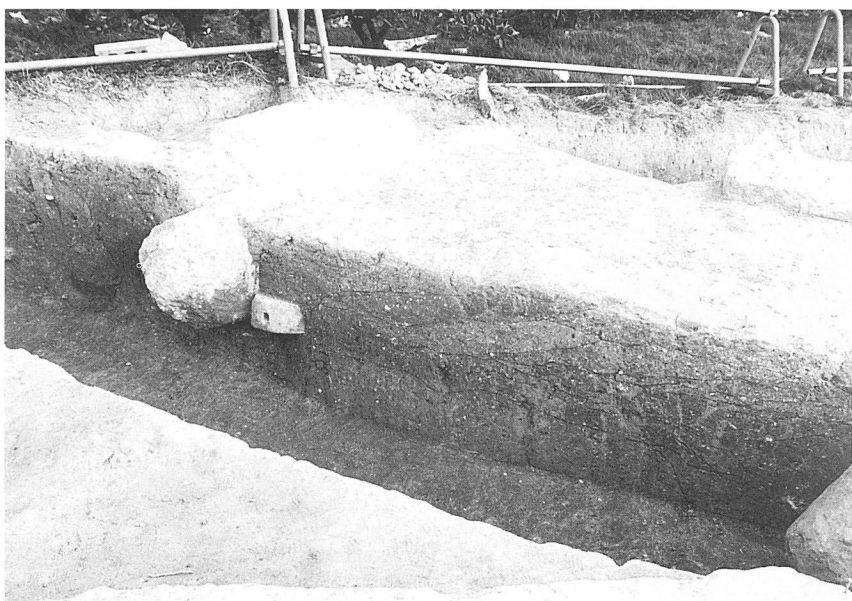
袖部基底石抜き取り穴検出状況
(東より)



墳丘基底溝検出状況(西より)



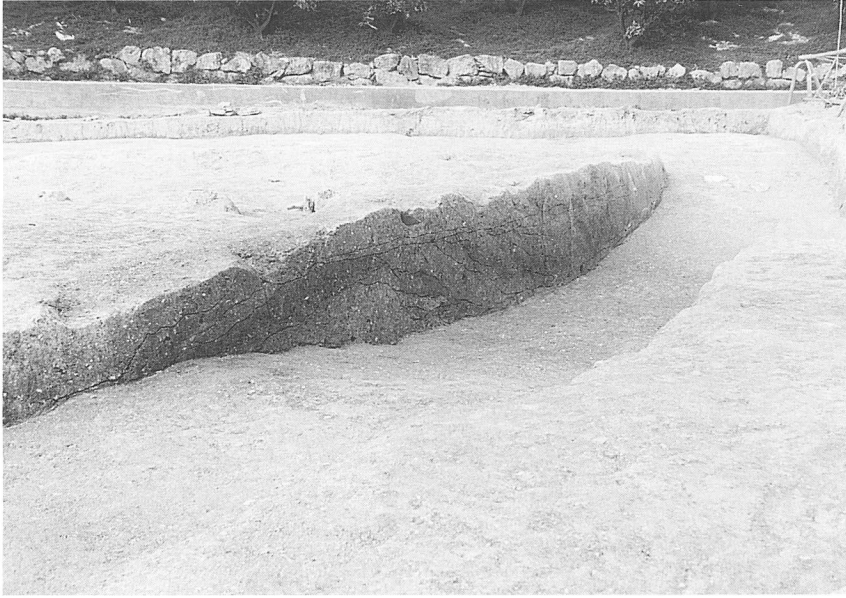
墳丘断面（Aライン西側）



墳丘断面（Aライン東側）



墳丘断面（Dライン）



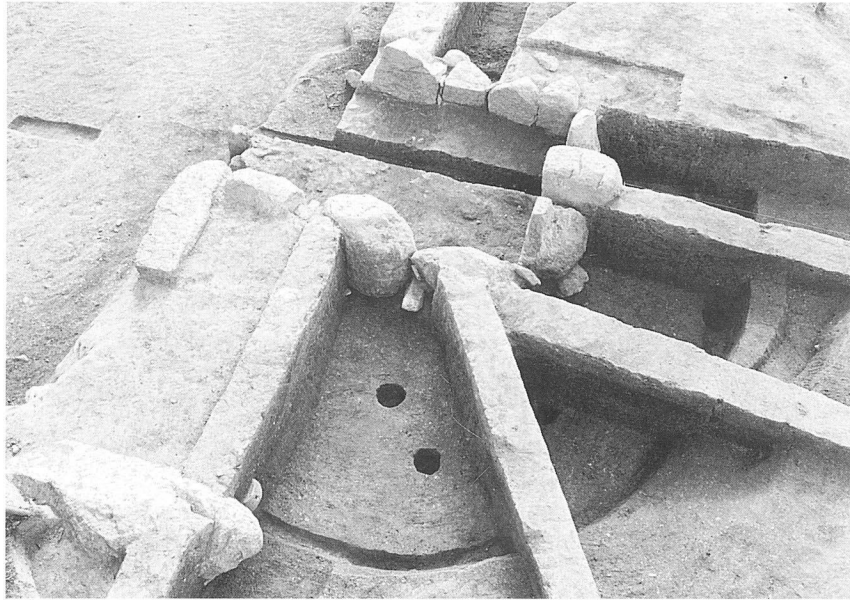
墳丘・周濠断面（Cライン）



側壁基底石掘り方（Aライン
東側）



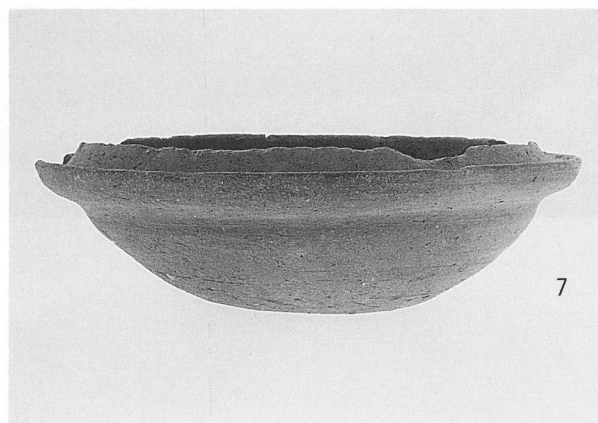
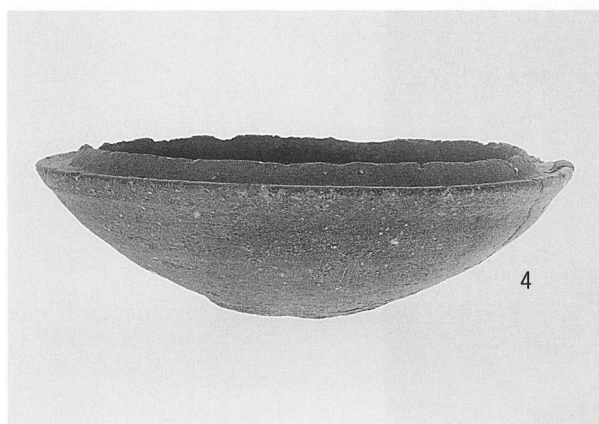
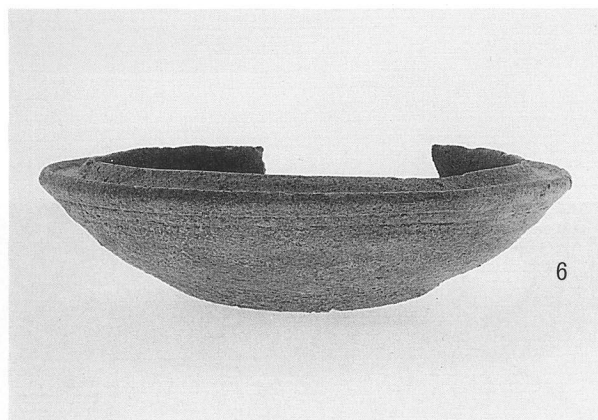
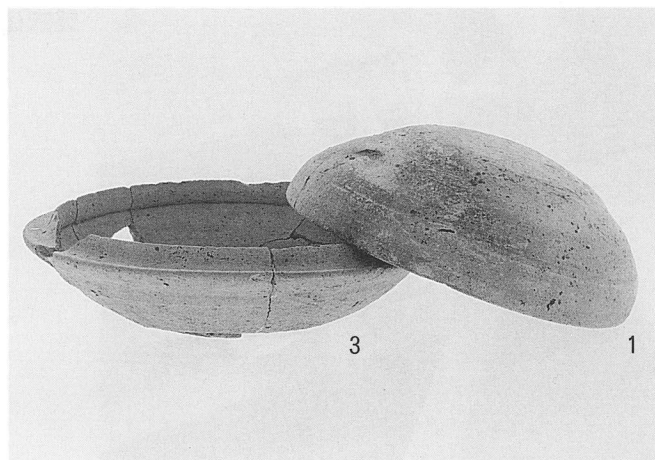
奥壁基底石掘り方（Bライン）

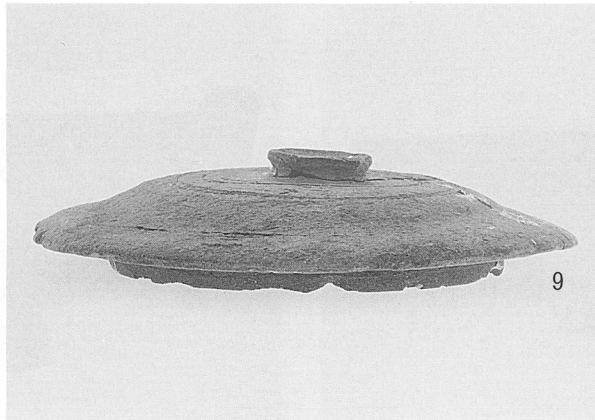
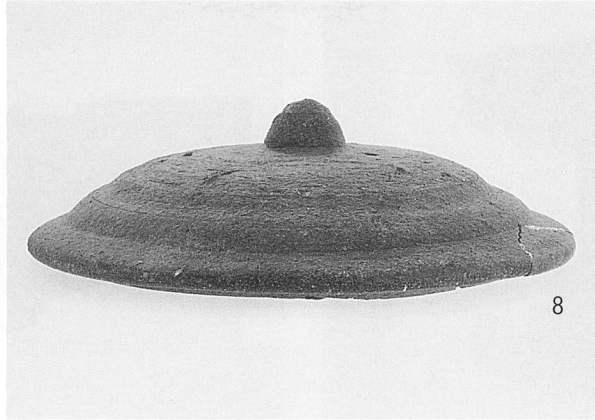


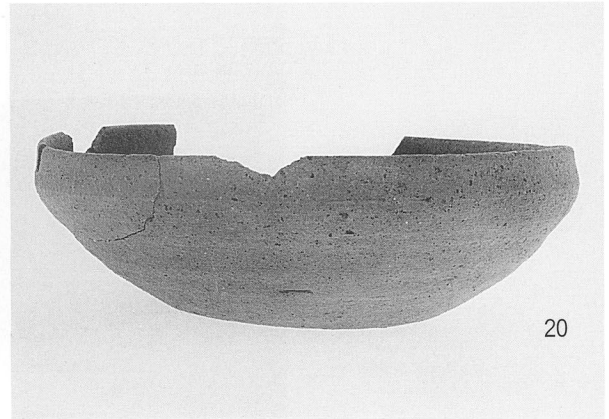
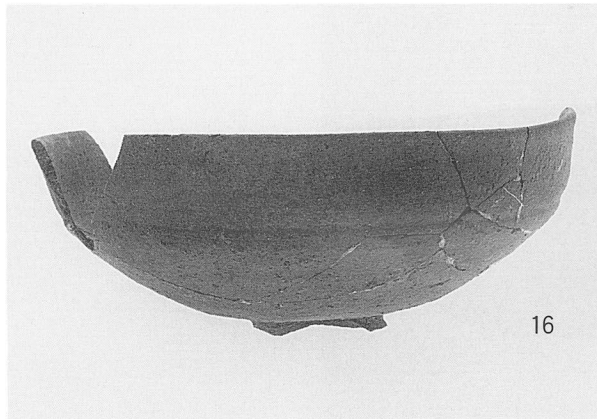
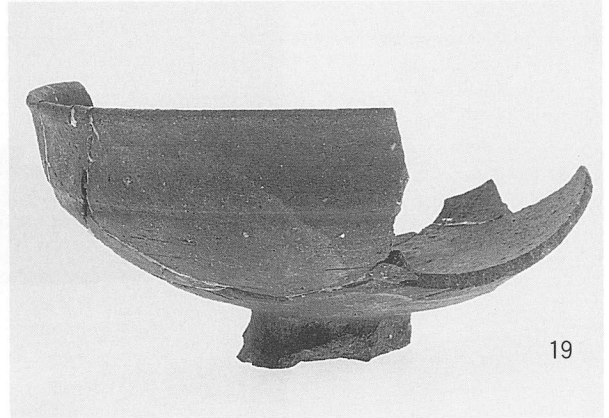
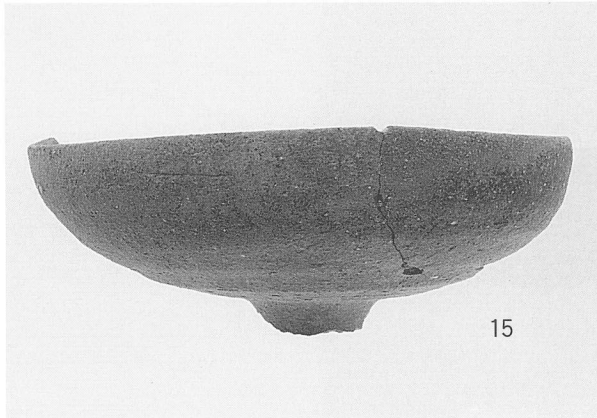
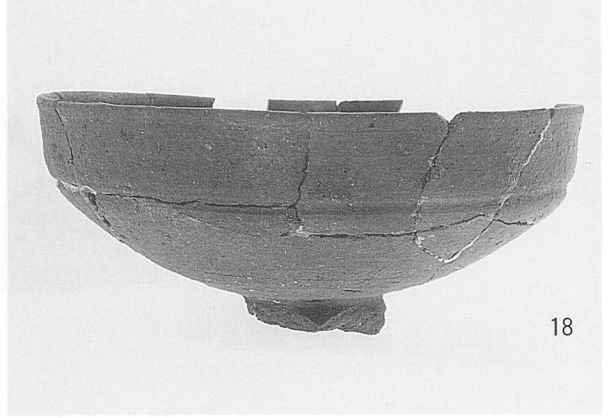
竪穴住居検出状況（北より）

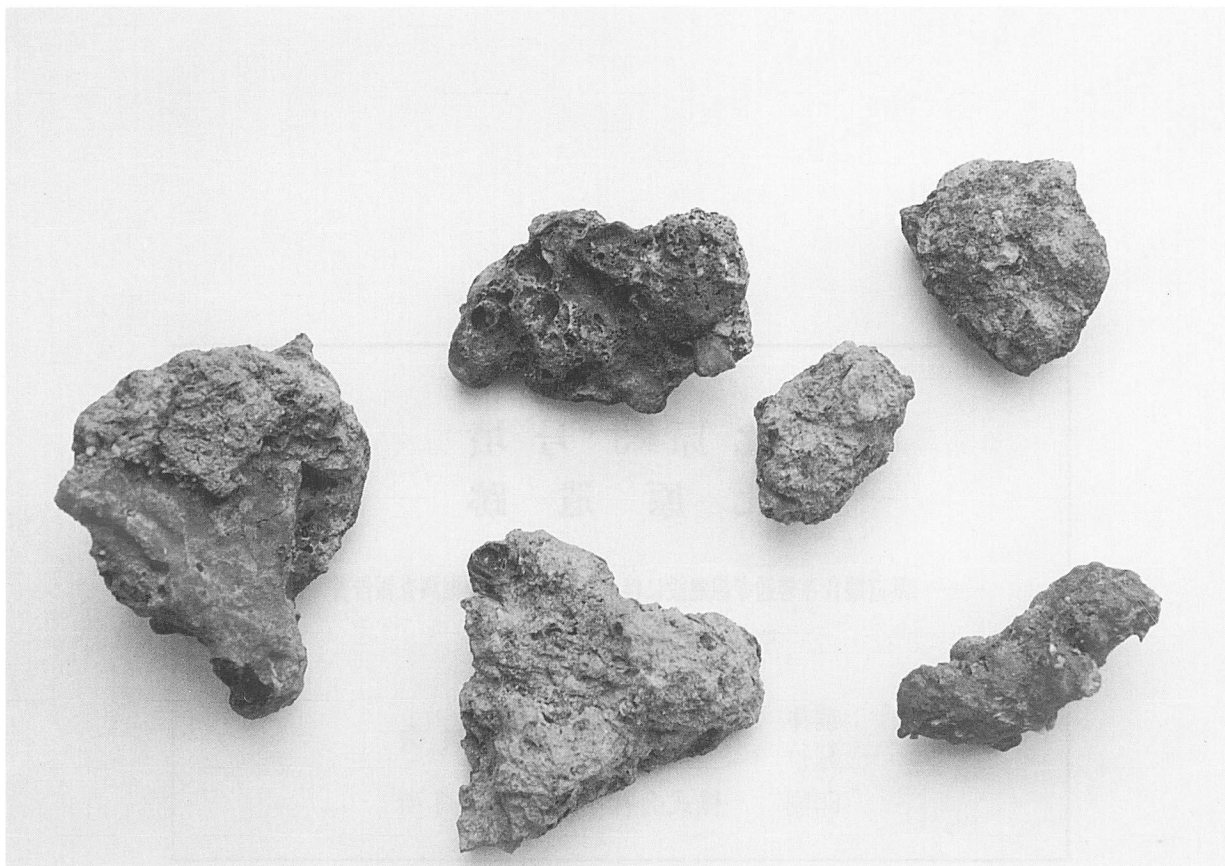
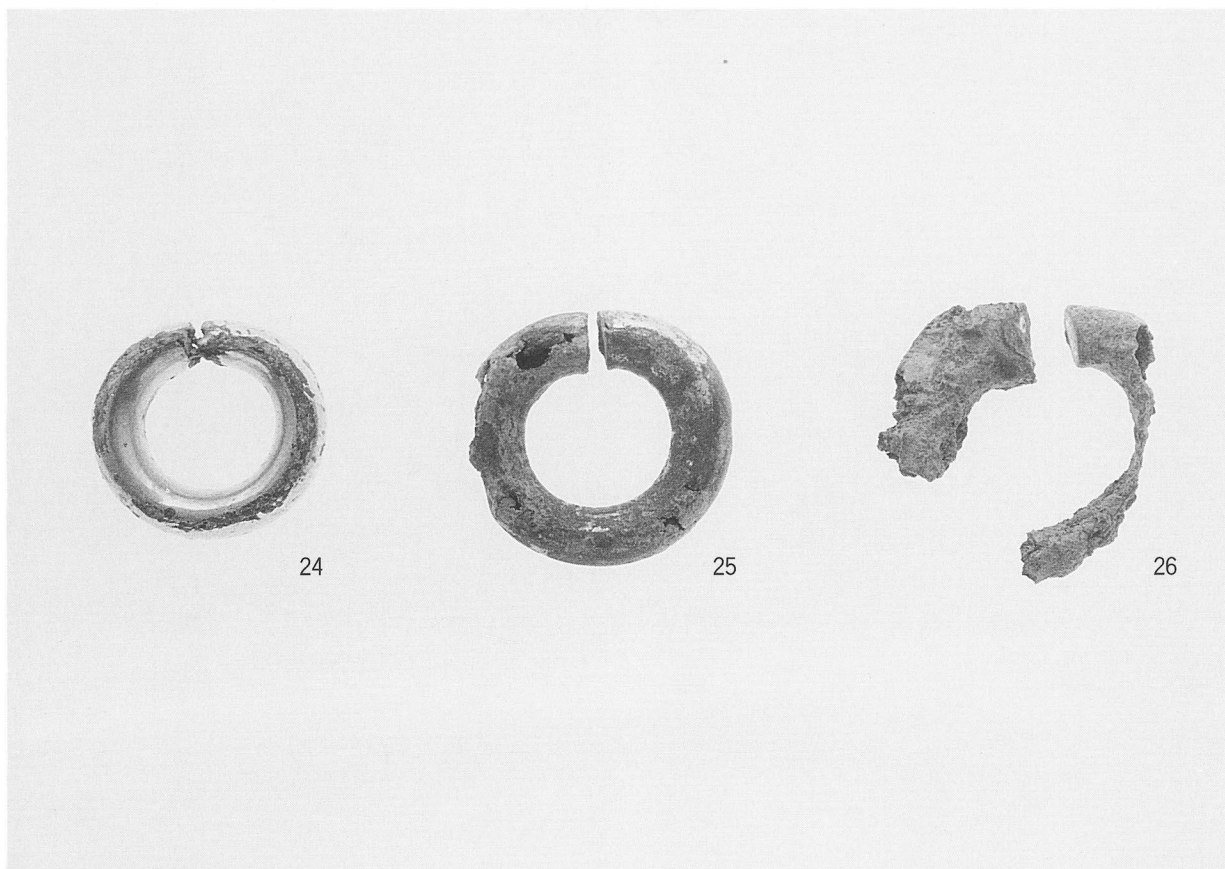


竪穴住居完掘状況（西より）









周濠等出土鉄滓

北原3号墳
北原遺跡

—— 県道観音寺善通寺線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

平成7年3月31日 発行

編集 香川県教育委員会
発行
印刷 株式会社 中央印刷所